

617.7-N77ウ



1200500749240

77
77

0
複写

薄荷除虫菊古老座談會記錄

日本輸出農産物株式会社發行



始



昭和十七年五月

617.7
N77

薄荷除虫菊古老座談會記錄

日本輸出農產物株式會社

序



除蟲菊と薄荷は、いづれも、我が國の特産物であつて、世界第一の産額を有し、主として諸外國に輸出せられ、嘗ては外貨獲得の有力なる手段として重きをなした重要農産物であるが、從來價格の變動常ならざりし爲、動もすれば其の投機的性質に禍せられて、之に關する眞摯なる研究に充分ならざる憾がないでもなかつた。政府はここに鑑みるゝところあり、さきに農林省内に除蟲菊薄荷研究會を設け、斯界の權威を集めて、除蟲菊薄荷に關する各般の研究を行は



しめんとするは誠に慶祝に堪へざるところである。弊社はその研究資材に供せむが爲に、先般業界の古老數氏の會合を煩はして座談會を催し、諸氏の貴重なる體驗を聴取する機會を得た。本冊子は其の速記録を印行せるものである。除蟲菊薄荷が僅々數十年の間によく今日の世界的地位を築き上ぐるに至つた先輩の粒々辛苦は、本冊子によりて初めて世に明らかにせられたものと云ふを得べく、その努力に對して深甚の敬意を表すると共に、斯界の爲に貴重なる文獻を得たることを喜び、一言を序して出席者諸氏の勞を謝する次第である。

昭和十七年五月

土屋正三

薄荷除虫菊古老座談會

一、日時 昭和十六年十一月二十四日

一、場所 大阪市星ヶ岡茶寮

一、古老出席者 (敬稱略、年齢順)

- 上山英一 郎 (八〇歳)
- 安住伊三 郎 (七五歳)
- 矢澤藤太郎 (七二歳)
- 矢澤わか (七一歳)
- 長岡佐介 (六五歳)
- 楠瀬正一 (五三歳)

一、臨席者 (敬稱略)

- 石井 磐 根 (農林省特産課技師)
- 木南喜代治 (農林省特産課技手)

一、會社側

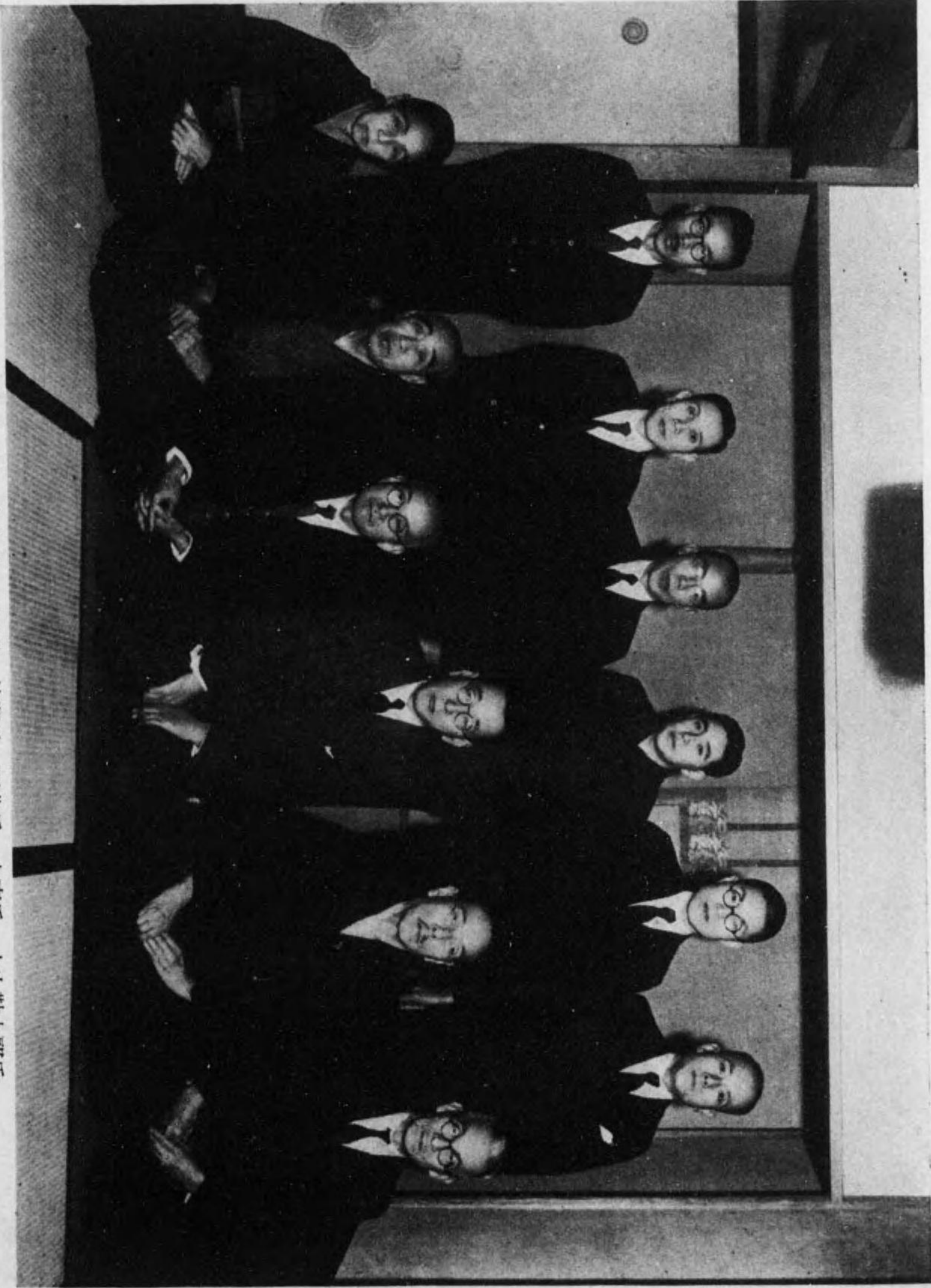
- 土屋正三 (會社副社長) 田口 隆 (營業部長) 宮本丘式 (神戸支店長) 東 弘 (業務課長)
 - 新開千年 (第二課長) 齋 藤 勇 (神戸支店營業課長) 矢野和夫 (神戸支店營業課長)
- (寫眞ハ發聲順ニ掲載セリ)



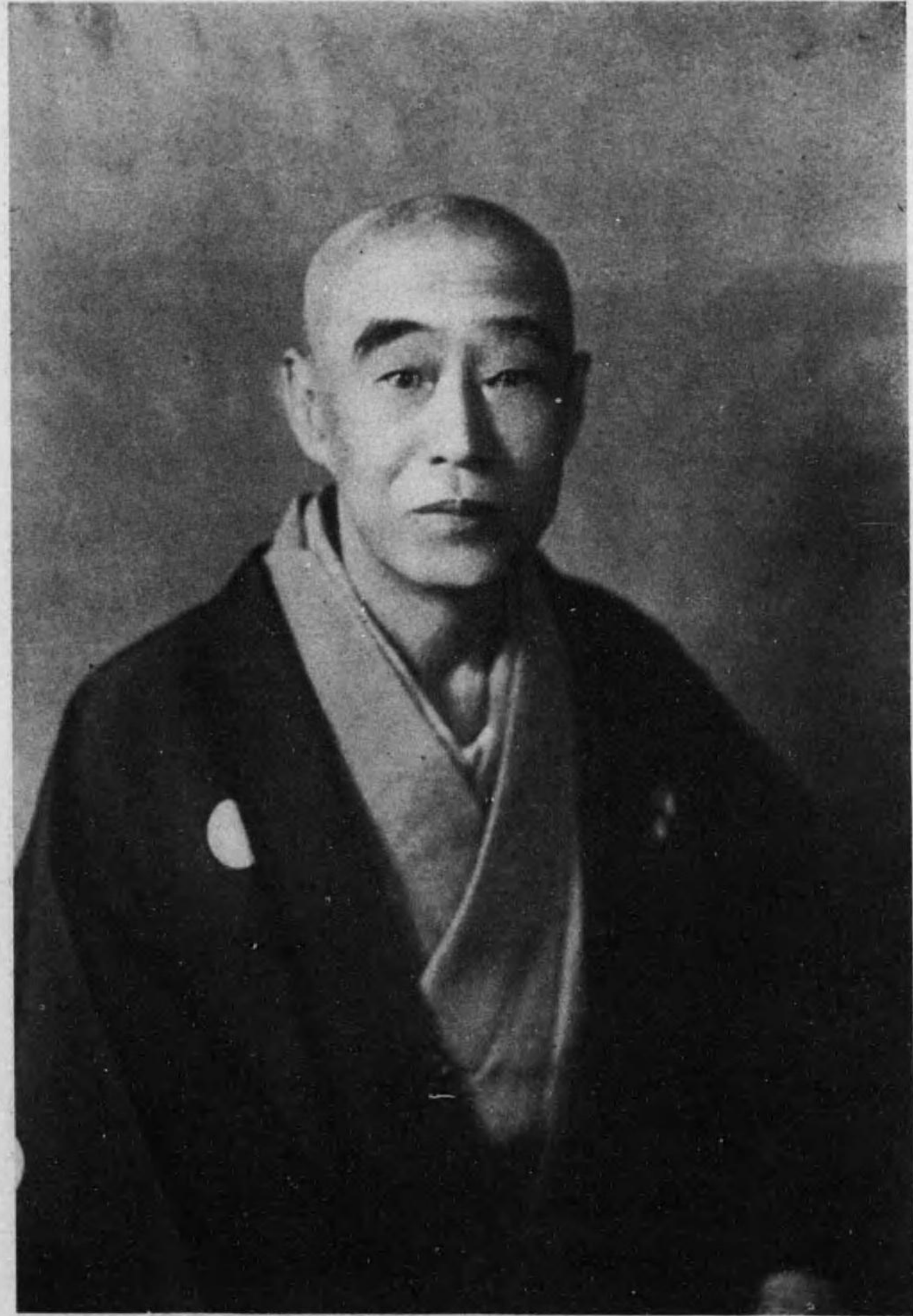
當日の座談會場



上山英太郎氏



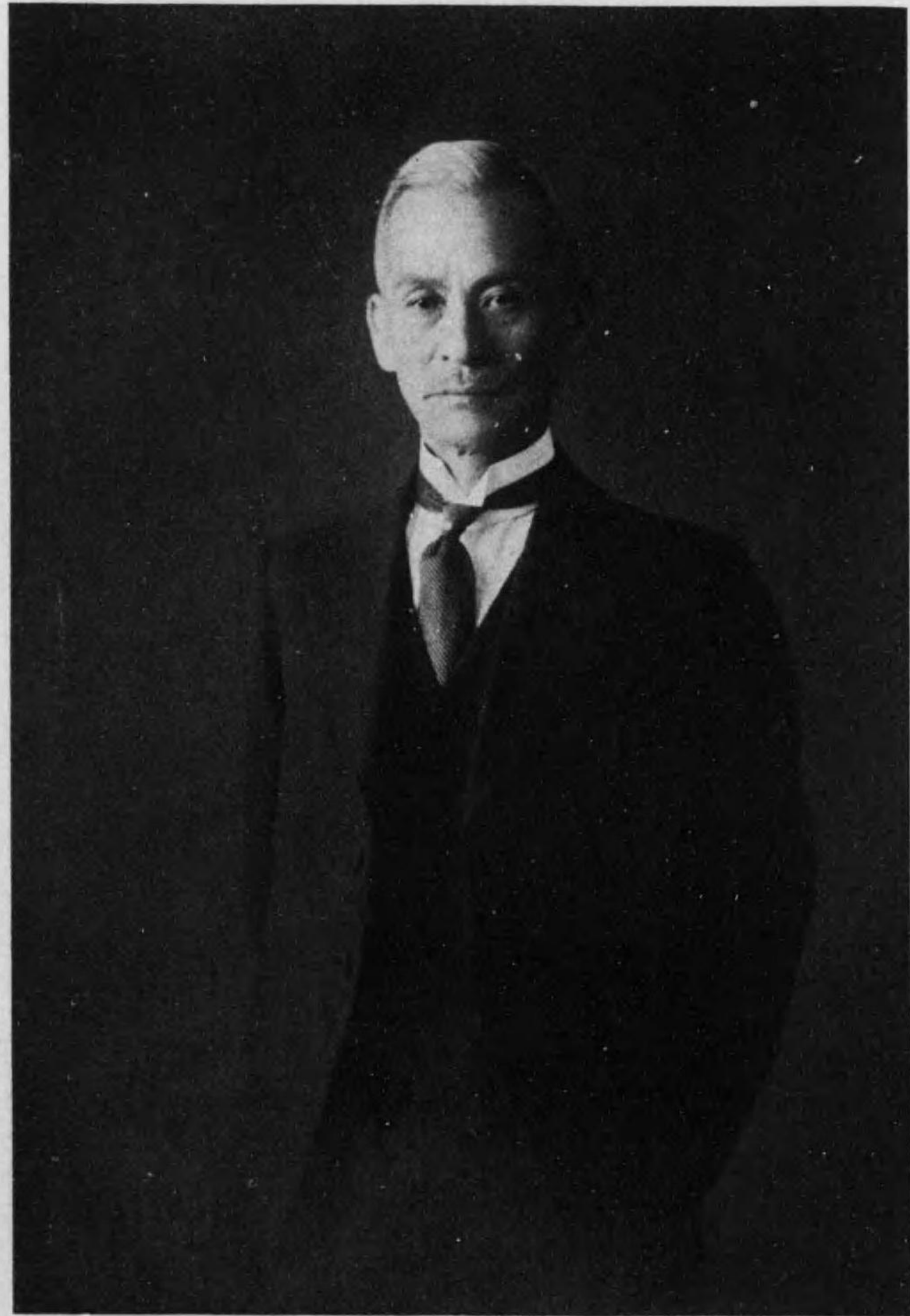
(後列向つて左より) 宮本氏、田口氏、楠瀬氏、石井氏、木南氏、上山勲太郎氏
(前列向つて左より) 矢澤夫人、矢澤氏、安住氏、土屋氏、上山氏、長岡氏



矢澤藤太郎氏



安住伊三郎氏



長岡佐介氏



矢澤わか夫人

會社ニ毎年十萬圓ノ補助金ヲ交付スル事トナリ昭和四年ヨリ
同方面ニ開航スルニ至リ貿易額ニ偉大ノ發展ヲ見ルニ至レリ
一、大正十五年十一月大阪駐在タイ王國名譽領事ニ任命セラレ
爾來日タイ兩國ノ親善ニ努メ來朝ノタイ國官民ニ好感満足ヲ
與ヘ來レリ

一、昭和二年一月外務省及ビ大阪商工會議所ノ囑託ニ依リバル
カン航路研究ノ爲メタイ國ヲ經テ埃及、希臘、土耳其、ブル
ガリヤ、ルーマニヤ歐洲各國ヲ巡察シテ航路ノ研究ト日本品
販路開拓ニ努力セリ

一、昭和四年上海ニ安住化學工業廠ヲ設立シ同地ニ於テ蚊煙香
ヲ製造シ支那全土ニ販路ヲ開拓ス

一、常ニ除蟲菊製品(除蟲菊粉、晝夜カトール、安住かとり線
香、エキカトール、高級カトール等)ノ海外輸出ニ努力シ前
後十數回ニ亘リ世界各市場ヲ巡歴シテ販路擴張ニ盡瘁セルノ
ミナラズ社員ヲ屢々海外ニ派遣シ現在世界四十餘ヶ國ニ輸出
ヲ爲スニ至リ日本品ナルガ故ニ品質優良ナリト強調シ世界到
ル處ニ信用ヲ博シ居レリ

一、昭和十二年支那事變勃發ニヨリ上海方面戰禍ニ罹リ其ノ被

害激甚ヲ極メ之ガ復興ニ關シ上海工業同志會ヨリ同大阪支部
長ニ擧ゲラレ銳意復舊策ニ努力シ今日ニ至ル

受賞及光榮

一、除蟲菊製品ヲ卒先海外ニ輸出販路ヲ擴張シ國富増進ニ奮闘
セルハ衆民ノ模範ナリトテ大正九年勅定ノ綠綬褒章ヲ下賜セ
ラレ、次デ同品ヲ世界的ニ輸出擴大セルヲ賞サレ昭和十一年
一月綠綬褒章ニ附スベキ飾版ヲ下賜セラレ

一、昭和七年十一月大阪府下ニ陸軍特別大演習舉行アラセラレ
シ砌長クモ天皇陛下ニハ産業御獎勵ノ御思召ヲ以テ安住大藥
房ニ牧野侍從御差遣ノ光榮ニ浴ス

一、昭和十年九月日本産業協會總裁 伏見宮博恭王殿下ヨリ産
業貿易功勞者トシテ表彰セラレ

一、大阪商工會議所議員勤續十年記念トシテ英國製電氣置時計
ヲ、勤續二十年記念トシテ金盃ヲ、同二十四年勤續功勞賞ト
シテ油繪肖像畫ヲ贈與セラル

一、其ノ他略ス

矢澤藤太郎氏ノ略歴

一、生年月日 明治三年六月十八日

一、出生地 東京市京橋區三光町(區域擴張ニ因リ取拂ヒ消滅)

一、本籍地 神戸市葺合區八幡通一丁目七番地

一、現住地 神戸市須磨區鹽屋町一三九番地(舊明石郡垂水町鹽屋昭和十六年六月市編入)

一、略 歴

一、商業實習ノ爲茂木商店主初代茂木總兵衛氏ニ仕ヘ修業

一、明治二十二年茂木商店ヲ退店獨立ノ上薄荷事業ヲ開始ス

一、明治二十五年春北海道札幌郡苗穂村三十番地ニ薄荷苗ヲ移植ス

一、明治三十年資本金十五萬圓ニテ設立ノ日本薄荷株式會社ノ取締役ニ就任ス

一、明治三十六年五月神戸市ニ移轉ス

一、昭和八年北海道信用購買販賣組合聯合會薄荷事業開始ニ當リ製造技術ノ指導ヲナス

矢澤わか夫人の略歴

- 一、生年月日 明治四年一月九日
- 一、出生地 横濱市住吉町一丁目
- 一、本籍地 神戸市葺合區八幡通一丁目七番地
- 一、現住地 神戸市須磨區鹽谷町一三九番地(舊明石郡垂水町鹽屋昭和十六年六月市編入)
- 一、略 歴
 - 一、明治二十三年藤太郎ト結婚ス
 - 一、明治二十六年薄荷調査ノ爲渡米ス
 - 一、昭和八年北海道信用購買販賣組合聯合會薄荷事業開始ニ當リ、薄荷製造ニ關スル技術ヲ現地指導ス

長岡佐介氏ノ略歴

- 一、生年月日 明治十年五月十一日
- 一、出生地 京都府久世郡富野莊村字富野
- 一、本籍地 横濱市中區尾上町一丁目九番地
- 一、現住地 神戸市葺合區磯上通八丁目
- 一、略 歴
 - 一、インセクトパウダー取扱 明治十二、三年
 - 一、除蟲菊輸出取扱 明治二十七、八年
 - 一、薄荷取扱 文化十一年(創業當時ヨリ)
 - 一、明治二十一年八月長岡佐介商店へ入店ス
 - 一、明治二十二年十一月長岡佐介商店横濱支店開設ニ伴ヒ同店ニ勤務ス
 - 一、明治三十一年長岡家ヲ相續シ店主トナリ現在ニ至ル
 - 一、明治二十八年横濱支店ヲ本店ニ改組シ其後神戸、濱松、旭川、野付牛、遠輕、名寄、尾道、朝鮮、臺灣、上海ニ支店出張所ヲ設ケ薄荷、除蟲菊ノ製造加工、薬用人蔘、糸瓜、干生姜等其他薬種天産物ノ栽培、販賣、輸出業ヲ營ム
 - 一、大正十二年關東大震災ニ依リ横濱本店ヲ神戸支店ニ移シ神戸市外ニ薄荷工場、除蟲菊加工工場ヲ新設シ其後昭和六年ニ至リ除蟲菊加工場ヲ改組シ、長岡驅蟲劑製造株式會社ヲ創立ス
 - 一、長岡佐介商店ノ創立ハ文化元年ニシテ現在ハ四代ニシテ代々長岡佐介ヲ襲名シ今日ニ至ル

楠瀬正一氏ノ略歴

- 一、生年月日 明治二十二年七月二十六日
- 一、本籍地 高知縣長岡郡大篠村大桶甲二一七番地
- 一、現住地 神戸市葦谷區上筒井通七丁目一番地
- 一、略歴
- 一、明治參拾九年高知市立高知商業學校ヲ卒業ス
- 一、同年神戸市合名會社鈴木商店ニ入り樟腦薄荷部及魚油部ニ勤務ス
- 一、大正七年同店樟腦薄荷部長及硬化油部長トナル
- 一、大正七年貳月日本樟腦株式會社創立ニ際シ監査役トナリ今日ニ及ブ
- 一、自大正七年至昭和貳年期間ニ於テ支那樟腦株式會社取締役、帝國樟腦株式會社取締役、合同油脂株式會社監査役ニ就任兼務ス
- 一、昭和貳年前記鈴木商店薄荷事業ヲ繼承シ鈴木薄荷合資會社ヲ創設シテ代表社員トナリ同八年株式會社ニ改組其ノ專務取締役トナリ今日ニ至ル
- 一、昭和八年神戸地方ノ同業者ヲ糾合シテ神戸薄荷製造業者聯盟ヲ結成シ其ノ會長トナリ今日ニ至ル
- 一、昭和拾參年日本薄荷輸出組合創立サレルニ當リ理事長ニ就任今日ニ至ル
- 一、昭和拾五年參月參拾日兵庫縣ヨリ商工更生委員ヲ委囑サル
- 一、昭和拾五年六月拾七日内閣ヨリ日本輸出農産物株式會社設立委員被仰付
- 一、昭和拾五年七月拾壹日農林省ヨリ一般農林水産物價格形成專門委員會委員ヲ命セラル
- 一、昭和拾五年八月廿六日日本輸出農産物株式會社ヨリ本社參與ヲ委囑サル
- 賞
- 一、昭和拾四年拾貳月六日華族會館ニ於テ畏クモ日本産業協會總裁 伏見宮博恭殿下ヨリ産業貿易功勞者トシテ表彰ノ榮ヲ賜ハル

宮本支店長

皆様お揃ひになりましたので、私から一寸御挨拶申したいと思ひます。お寒いのに御遠路御老體に御出を願ひまして、誠に恐縮に存じて居ります。尙本日は農林省から石井、木南兩氏の御出席を頂きまして、誠に有難う御座います。

御承知の如く當會社は、指定農産物たる除蟲菊、薄荷、青豌豆、輸出茶豆(大手亡、中長鶉、長鶉、大福)茶種、及茶種油並に馬鈴薯澱粉(輸出向)の集荷統制を圖り、其の出廻數量を確保し、之を輸出軍需及一般民需に計畫的に配給し、需給の圓滑を圖ると共に外貨の獲得を努むることを目的として生れたのであります。最近の海外情勢では輸出は殆んど不可能な状態となつてしまひました。會社の取扱品たる薄荷にしても、除蟲菊にしても、相場の變動によつて利益をあげて行くこと云ふ事が主となつて居りましたので、従來は輸出に致しましても、除蟲菊は殆んど乾花の儘、又薄荷に致しましても腦なり油なりをその儘出して居つたと云ふ状態でありまして、諸外國が日進月歩でどん／＼進歩して行く時代に於いて、原料品を輸出すると云ふ事は全く能のない事でありまして、この輸出の行詰つた閑散時期に置きまして、進んで何等か國策に貢獻する様なことを、例へば薄荷、除蟲菊におきまして、新しい用途を見つけるとか、或は又新しい製品を造るとか云ふ方面の研究を此の時代においてしたいと云ふ事になつたので御座います。それで此の春から二回に亘り、斯道の權威、學者さう云ふ方に東

京に集つて頂き、研究会と云ふものを開き、それがどうやら永久的なものになりまして、農林省の主催の下に今後続けると云ふ事になり、私共の會社ではそのお世話をするに云ふ事になりました次第であります。

此の研究会の先づ手始めの仕事として最近はこの兩品に關する種々の文獻を蒐集すると云ふ事に着手してゐる次第であります。

その意味におきまして斯界の大先輩たる貴方がたの思出話なり、或ひは御苦心談を承はり、事業の開拓者として貴方がたの歩んで來た道をお聞きし、その經驗を斯業の今後に生かして行きたいと存する次第であります。今申上げた様な趣旨で御座いますから、どうか一つぼつぼつ皆様の御苦心談なり何なり、お話し願ひたいと思ひます。就きましては土屋副社長にこの懇談會の司會をお願いして順を逐ふて一つお願ひします。之からすぐ始めます。

土屋副社長

それでは私が進行係を勤めます。本日お話を願ひます事項はこの間要項を差上げてある筈ですが、これは必ずしもかう云ふ問題をお話し願ひたいといふ意味ではありません。たゞお話の便利のよいやうに御参考に供したに過ぎませんから、必ずしもこの要項によらずして、お話し願つて結構だと思ひます。相當に長い時間がかかるだらうと思ひますから、ごゆつくりおくつろぎになつてお話し願ひます。

それから聞いて居られる方で種々質問を出したい方もありますかも知れませんが、時間の關係で一應お話を伺つて、その上で質問を受けるといふやうな段取にしたら如何かと思ひます。最初に除蟲菊の方からお話し願ひたいと思ひます。上山さんから一つどうぞ。

上山英一郎氏

では失禮で御座いますが、私から申し上げます。最初にケニヤ除蟲菊の事についてお話し申し上げたいと存じます。ケニヤ除蟲菊に對しましては、業者が何れも非常に脅威を感じてゐる様であります。私と致しましては、そう／＼無暗にケニヤ除蟲菊を恐れる事はないと思ふてゐます。それはかつてアメリカに除蟲菊が盛に作られて居つた時に、私がそれに向つてアメリカの除蟲菊をどうかして壓倒せねばと云ふ信念から、どう／＼其目的を達し、アメリカの除蟲菊を殆んど全滅せしめたと云ふ經驗を持つて居る爲、ケニヤ除蟲菊と云ふものを左程におそれません。又恐れてはならぬと思ひます。業者がこのケニヤ除蟲菊に脅威を感じてゐる主なる點は、ケニヤのものはピレトリンのパーセントが多い爲、則ち日本除蟲菊の有効成分のパーセントが少いと云ふので、大變脅威を感じてゐられる様に思ひます。

併し日本の除蟲菊も始めから、パーセントが少なかったわけでは御座いません。實際は日本の栽培者も製造家もだん／＼除蟲菊に馴れて来るに従つて、その扱ひは非常に粗末になつて來た。第一に自分の考へて居りますのは花の摘み方でありませう。只今の日本では利害の關係上からでもありませうが、それをカナゴでスゴキ取つてしまふ良い花もつばみも、悪い駄目になつた花も、カナゴで一緒にこき落して了ふ。併し除蟲菊の創植せられた頃はそんな亂暴な事はしませんでした。夫れは私等は花を指で叮嚀に摘み上げて、成るべく莖の少しもつかぬ様に摘み取つて、それを二回にも三回にもやりまして、俗に飛び花と云ふて、どんと早くに飛び／＼に咲く、此の早咲を第一に摘む夫から摘み加減のもの、つまり一番有効成分の多い時のものを順次に摘んだのです。それ故其の頃の除蟲菊の效能は、實に能く効いて其のピレトリンも今日のケニヤにも決してまけてゐなかつた。否それ以上であつたと自分は思ふてゐるのであります。只今ではそんな事はせなくなつたのだ、又一面多少連作の關係や、何かで段々品質が悪くなつて來たのだと思ひます。それを考へずに只世間では、皆ケニヤ、ケニヤと云ふて恐しがつてゐるので、私は何と弱い事だと齒痒く思つて居るのであります。又ケニヤは生活程度は低いと云ふ事も、亦脅威の一つに加へて居る様でありますが、生活程度や何かは世界の共通事で、すぐに彼の地も向上して來る。日本も除蟲菊の始めて來た明治十七、八年頃は、女工一日六七錢、男工一日十二、三錢でありましたから、ケニヤ地方でも同行程を辿り來るとせば、此點も亦餘り杞憂に過ぎると思ひます。併し自分はアメリカの菊を壓倒してやらんと思ひし時は、専ら此の生活程度の相違に重きを置きまして、まんまと目的を達しました。今業者は私の

米國を壓せしと同様の行程に自から求めて恐怖を招く。之は一つ考へていただきたいと思ひます。寧ろ自分は此の際日本の生産が過剩にもなり、無代に等しき安價にでもなつたら、彼れケニヤの除蟲菊の未だ深き甘味を知らぬ内に壓倒してやりたく思ひます。徒らに怯ひへて萎縮するよりは、進んで彼を壓倒する様大和魂は軍人同様、業者に希望したく思ひます。無論空威張り丈けでも行かぬ事、一面品質の向上の事も考へねばならぬと思ひます。又經驗の一つを聞いて頂きたいのは肥料の事ですが、當時は只今の様に農業知識は進んで居りません爲めに、肥料の事扱てんで分りませんでした。けれども私の記憶に残つてゐるのに、今で云ふと窒素肥料が多いと云ふと、木そのものはよく出來ますが、花は其割合に着かぬのみならず、枝葉は繁茂に過ぎて蒸せ枯れをする、又反對に萎縮して花の着かぬものは出來る。隨つて幸ひ咲いた花もボカ／＼して效能が少くなると思ひます。併し之は間違ひかも知れませぬが、草の軟かいものを作るよりは可成莖の堅いもの、隨つて花のしまりしものを作る。其の頃はピレトリンのビの字も知らぬ事、兎も角も緋メ粕は菊に對して、唯一の好肥料と思ひ、緋萬能を思ひました。其内木灰を施すと花は早く咲くとて木灰杯も肥料としてやりました。その頃の私等には窒素も燐酸もどんなものか分りませんでした。兎も角繁茂に過ると菊には不適當と思ひました故、なるべく人糞であるとか堆肥であるとかを避けて、花の收穫の多いと云ふものよりは、寧ろよく利くよいものを作るかう云ふ事を前提にしてやつて居りました。それで相當いゝものが作りあげられた様に、自分は思ふて居ります。損得勘定で粗雑にやると云ふ事は、結局除蟲菊の品質を、知らず／＼だん／＼悪くしたものだと思ひます。併しカナゴで一

度にこき落とすと、非常に手数が減る、手数が減ると夫れだけ利益が増へると云ふ關係になる。結局仕事の忙しい時に人手を省く爲に、かう云ふ事をする様になつて來たので仕方がない事だと思つてゐますが、今日はケニヤもまだ始めてありますから、叮嚀に悪い花は焼き捨て、いゝものだけ輸出すると云ふ様な叮嚀なことをしてゐるようですが、彼方も矢張り利害上から早晩此方の轍を踏んで來るものと思ひます。何れぼつ／＼カナゴでやる様になり、又收穫も多くなるために、いろ／＼の人造肥料も使つてくる。又連作の爲忌地になつて來る。そして何んとなく彼方の品質は下り坂になると考へて居ります。之に引換へ日本では外敵ケニヤと云ふものが出来た爲、とてもこんな仕事をしてゐては、日本の除蟲菊はどうもならぬ。第一品質の改良もせねばならぬ。摘花もかう云ふ風にしてカナゴでこき落す様な事はやめなければならぬ。肥料も考へなければならぬ。かう云ふ風に外敵の刺戟によつて、だん／＼此れが向上して來て、栽培當初の心持ちと同じになると思ふ。またそれが今後本業關係者の義務と思ふて頂かねばなりません。彼れは下り坂となり、此方が上り坂になつて行く、殊に其の結果農業上手な日本の事であるから、直ちに自覺してまた／＼内に、前の輸出全盛の日本除蟲菊に復活するだらうと、私はかう云ふ勝手な事を考へてゐます。そう／＼一がいに恐しがつて氣を落さないでもよいと解釋を致して居ります。さう云ふ意味で自分としては前途を悲觀はいたしません。皆さんもどうかこの氣持で、斯業のために努力して頂きたい。兎も角私はかう云ふ様に思つて御座います。

餘談であります、此の人手不自由の折柄昔の様に二回でも三回でも、手摘みにせよと云ふ事は不可能と思ひます。夫れで花は可成一齊に咲く様の工風をすれば、よろしいと思ひます。夫れは不可能の事でないと思ひます。最初の頃は花は越年したら效能はなくなる。夫故其年の花は其年使用せねば駄目なりとの事で、所が花の咲くのと同時に蚤は發生して來る。花は急ぐ處が、なか／＼咲かぬ。其處で早咲きの必要を感じたので、飛び花に目印を附けて、最も早く咲いたものゝ種を取る二、三年も繰り返へすと相當早く揃つて咲くものは取れました。又之と同時に自分は連作を忌む事にも苦心しました。學理は知りませんが、菊其のもの忌むべき何ものかあらんと思ひまして、之を水田に植ゑる。其年の毒素を水にて腐敗せしむと云ふ丈けにて、深い考へを持ちませんでした。之が連作忌を免れる事に成功しまして、豫想外に米の裏作となりて、今は私の地方の一特色となつて旺んに水田に栽培される事になつて居ります。此の意味に於いて畠地の連作、又は一齊に開花の工夫は出来るなれば、都合のよき事と思はれます。

それから栽培最初のお話を致しますと、私はアメリカのサンフランシスコ、サター街と云ふ所の、百二十番地に日本植物輸出入會社社長H、E、アーモア氏と云ふ人から種子を送つて貰ひました。最もそれは除蟲菊だけでは御座いません。その頃の書物にも載つてゐますが、日本とアメリカとは最も盛んに蔬菜や果樹、花卉の交換が流行したのであります。アーモア氏が送つて來た其種の中に、ビユーハクと云ふエフ札がついたものがありまして、彼れの説明では之を栽培すると、非常に有利有益の植物である。アメリカで之を栽培せる一農家は、一挺

の畝で豪農になつてゐるものがある。又之に携はりしものは富豪となつて、現に銀行なんかを建て、やつてゐるものが、澤山あると云ふ事を説明されましたので、私はそれを深く信じて欲しいと、二人連れで熱心に之を栽培し始めました。明治十八年末のことです。栽培の手順は後程申し上げますが、最初は植木鉢杯にも植ゑたのですが深甚の注意を拂ひました故、順調に發芽繁殖し、次いで田畑へ本式に植ゑたのであります。之は紀州の名草郡黒江の室山と云ふ所の籠池と云ふ畑地と、紀三井寺と云ふ所の、親戚の畑地とに始めて栽培しました。ついで地續きの徳川侯爵家の土地を拂下げを受けまして、大々的にその種苗を植つけました。夫れは適地でありし爲、段々繁殖しました。此のビユーハクなるものは、則ち今の除蟲菊なのであります。あちらでは何と云ふてゐたか知りませんが、兎に角ビユーハクと云ふのは、カルフォルニアにての除蟲菊の稱呼で、之が開拓者にビユーハクと云ふ店は今でもありまして、それを商號にして、其店は現存して居り、私の店とは尙現に取引を繼續して居ります。

その頃の私は貧乏書生で御座いましたから、金がほしかつたので一株五錢、十錢、二十錢と只今では暴利令に觸れますが、内々他府縣へ賣りました。それで相當金が儲かりました。併し郷里の手許へは競争者が出て來ると云ふ恐れから、餘りよくない考へであります。成るべく賣らなかつたのです。所が除蟲菊の種子は一升何十萬粒と云ふ、隨分大量の種子、又之が播種栽培法はアームート氏直傳の事とて、發芽順調に益々繁茂終に植出し場所が狭くなつて來ましたので、植出し場に窮し、又苗も相當多數に出來ましたので、明治二十七年春早々新聞に

廣告して、公開賣り出す事に致しました。夫れはのみどり粉蟲殺草と云ふので興味を引きましたか、又は薄々此の除蟲菊の有利の事を知りてありしか、夫れは注文や照會の手紙は一時に殺到して、自分一人にては之が處理に手は廻りませんで遣り切れんでしたので、義兄弟の間柄にある帝國除蟲菊會社の前社長御前喜八郎氏に手傳ひ貰ふ事に致しまして、祕書兼販賣係をやつて貰ひました。廣告と云ふ事は之までは一切知りませんでした故、其効果の大きな事に驚きました。多數の手紙を配達夫がどつきりおろして呉れる事は、迎も愉快に感じましたのみならず、今にも大金持にもなる様の氣分は致しました。其の時の文獻は残つてをります。此の手紙の照會と同時に一面、又來訪の人も相當澤山ありました。此の來訪者中に岡山縣の渡邊小平太と云ふ人がありました。夫れは初期の事でもあり、私の家にて手廻し石臼にて、除蟲菊花をのみどり粉にしてゐる様子を見て歸りました。其時に種一合を五圓にてお買ひになりました。此の一合の五圓は當時にあつては、迎も高價のもの其一斗は五百圓となり、田地一反歩五十圓として、一町歩に價する譯で、隨分貪りし事なるも金をほしい一方の私としては、嬉しく快心禁じ難き日は續きました。

岡山縣にありましては、最近除蟲菊發祥調査の結果、此の渡邊小平太と云ふ人は、明治二十二年紀州の上山英一郎氏を訪問、除蟲菊種子一升を買ひ求めて歸國、之を播種栽培せしは岡山縣に於ける除蟲菊の發祥なりと云ふ事になつてをります。其後中國地方除蟲菊の發達狀況視察に行きし時、同地除蟲菊の先覺者と云ふので、此の渡

邊と云ふ人に笠岡にて面會しましたが、其時は一向氣附きませんでした。前に來訪されし時は淺口郡大島中村となつてありまして、同氏は其の後笠岡に轉住した事は分明の爲めに、はつきり分りました。夫から中國にて此の除蟲菊に眼覺めし人に、尾道久保町に幸田榮俊と云ふ人がありました。渡邊さんと同様二十二年でありましたけれど記帳によりますと（半紙四ツ折通ひ帳の遺ひ古しと手帳の遺ひ古しを利用して）幸田さんの方は少し先でした。私の銅像は尾道の千光寺の公園に建てられて居りますが、私の郷里よりは早く立てられたので昭和四年の事であります。郷里に立てられた碑は昭和十三年で御座います。之は記念碑と云ふ事になつて居り、尾道の千光寺公園に建ててゐる篆額は東郷元帥の御染筆で之には除蟲菊の發祥となつて居ります。又除幕式當日同市選出の代議士で鐵道參與官をなされし、鳥居哲と云ふ方は蜜柑は紀州に教へて貰つた。除蟲菊は紀州をリードしたしと式辭をお讀みになりました。自分の地が記念碑で、尾道が發祥の地になつて居るので、自分は何等か奇しき縁だと思つて居ります。私は除蟲菊の他に柑橘の爲にも、又いさゝか地方經濟界の爲にも貢獻して居りますが、除蟲菊の方は五十年の長きに亘つて、今日迄一心に努力して來たので御座います。除蟲菊栽培の獎勵は四國から九州、朝鮮、北海道に迄及んで居りますが、就中中國の瀬戸内海の島々には熱心に栽培の獎勵を致しました。此の方面が地味、地勢、氣候の關係等最も有望と思ひましたので熱心に致しました。最初は無償で苗を譲り、こちらの人間を無給で向ふへやつて、あちらを指導させました。今と違つて當時はかう云ふ知らぬことを奨めると、山師だと云うて相手にしてくれません。栽培の獎勵には中々骨が折れたのであります。御幣をか

つぐと云はれるかも知れませんが、最初は全く神の啓示によつて此所を開いたのであります。この事についてはお聞き願ひたい事も御座いますが、之は後日に譲りまして、播種より栽培に至る経路と、米國を壓倒して海外輸出を今日に至らしめたと云ふ事をこゝに一寸書いてあるので、話さして頂きたいと思ひます。只今申しました様にサンフランシスコの植物輸出入會社のアーモア氏から最初種子の受けたのは、明治十八年の末であります。當時珍重がつて居りましたので、それを内密に栽培致したのであります。最初は先刻申しました様に、種子を縣外へは少々わけましたが、餘り多くわけませんでした。之はアーモア氏の教に決して他所へわけないで、苗を多く作つて居れば、必ず大儲けが出来る。と云ふ事であつたのでありまして、その通りに致したので御座います。其後苗の繁殖と同時に宣傳によつたのもありませうが、一面除蟲菊苗の希望者は増して來ましたので、之に氣乗りして苗屋となり、儲け乍ら獎勵をした。其の結果除蟲菊の生産が激増したために、相場が暴落致しまして、一貫目が五圓、六圓に賣買されて居つたものが、一遍に一圓となり、終りには五十錢となり、たう／＼三十錢になつた事がありました。夫れは今と違つて市場が極く小さかつた爲です。この時獎勵の責任を各地方から詰込まれ、産品を引き取るべく強要されました。倒産に瀕した事も御座いました其時の事です。私は長兄より叱り飛ばされました。自分の所は倒れるのはよいが、兄貴の所迄倒されてはごもならんとて、迎もキツク叱られました。どうかかうか其場を切抜けました。

夫から明治三十七年の事です。日露の大戦が勃發致しまして、除蟲菊が軍用として買上げになつた。之はこゝにお出になる安住さんも御承知で御座いますが、此の時に市場には除蟲菊の在品が聊かもありませんでした。夫れは市場の狭い處へ、奨励の結果一時に産額増大暴落に暴落無代に等しき安價になりました故、前申しました様に奨励の責任を問はんが爲に、各方面から強制的に、而もブローカー達は市場の在品迄集めて、生産品として私に持込まれたので、市場は全く品皆無の有様となりました。其處へ軍用として買上げ、納入時は短日の事旁々この軍用品は全く自分の一手で納めました。記憶に残つて居りますのは、明治三十八年六月八日經理部より至急の呼び出して出頭致しました。次いで十一日、十二、十三、十四、十五日此の四、五日間と云ふものは、業者は大騒ぎで大阪の安堂、石津、田知本、清水氏等々多數のお方より手紙に、電報に、又御自身でお越になりましたが、私の方は多數の御用を御引受してあつたので、聊かも御分けせず何れ様へも御斷り致しました。

此の文獻はあります。又々御幣擔ぎであります。神に向つて此の幸運を幾回か感謝禮拜を致しました。一貫目が三十錢、五十錢で引受手のなかつた時に、栽培奨励の責任を果す爲には、如何にもして之が販路を見出さねばならぬ。夫には海外へ輸出しなければならぬと云ふ事を考へました。其頃米國にては換算しまして、一貫目五圓の價格を保つてあると云ふ事は兼々聞いて居る事とて、奨励の際には生産は二圓なら何程大量でも引き受けますと、云ふが儘に契約書を渡しましたのは、此の自信あつた爲であります。處がどうしても一時に増産した爲賣り路はないのであります。併し米國では五圓してゐるものが、此の唯の様な安價の除蟲菊が賣れぬ筈なしと思

ひ、又如何にしても海外へ出すより外に路なき事、よつて神戸横濱の商館を戸口押しに入つて頼みましたが、一軒として相手にして呉れませんでした。其の時には此の安價の除蟲菊を輸出して、儲けよう杯の觀念は少しもなく奨励の結果、生産せる除蟲菊の滞貨を何んとかして、販路を求めて一掃せねば相濟まぬと云ふ一念のみでありました。栽培奨励の責任上どうしても其儘にする譯に行かず、販路を開拓せねばならぬ其處には云ふ可からざる苦痛と心配がありました。夫故神戸、横濱の商館と云ふ商館を手當り次第に歴訪して、實に云ふべからざる辱しめ、只今此處にて申上げ様もなき様の、罵詈雑言を忍びて、尙熱心に訪問しました。御承知の方もあると思ひますが、當時の外國商館の横暴さは、連も問題にならぬ位でした。それで如何に田舎者と雖も、幾回か躊躇しましたが、夫にては目的を達し得ず、泣かん許りに毎日／＼先づ一日の賃金を定めて、俸夫を雇ひサンプルを一杯積みみて毛布にて、膝頭を覆ひ、各商館を一々廻りましたが、どの商館が何を扱ふかサツパリ分りません。併しそんな事には頓着なくめちやく／＼に這入りました。中には生糸屋に入りますし、又船屋さんに入り鐵屋にも入りました。叱られてもどうしても一生懸命に何邊でも廻りにくい處を、自分の良心に鞭うち、ある所ではうるさいやかましいと云つて前にあつた茶吞茶碗を勢に任せて、手ではねましたので額に當りましたが、之は先方の悪いのでなく、多忙の處へ執拗に行つた爲、こちらが悪るので謝罪をして辭去しました。

併し皆様にこんな體驗はお勧めしたくはありません。如何に事に熱心なりとてかやうに嫌がられる外國商館へ日本男子として、再三臆面なく行ける事でせうか、日本男子の面汚しは百も承知であります。栽培奨励の責任

上止み難きと、一は米國輸出の可能性ある確信に恥を忍んだのであります。其の苦衷はお察し願ひ度い。之は横濱の事ではありますが、話は神戸に移りまして慥か北町九一エムラスベと云ふ商館でありましたか、しかと覚えませぬが其處に中川安太郎さんとか云ふ番頭さんがありました。眼の大きな方で記憶に残つて居ります。只今でも居らしやるか知りませぬが、顔は見知りになつて居ります。此の商館へは度々出掛けて行きました。何回目でありましたか訪問した時に、向ふでは私の顔を見知つて居ります故、又五月蠅いものが來たとても思ひましたか、或は中食時でありましたか、私の顔を見るなり惶惶と逃げん計りにドアを開け飛び出しましたが、其時靴の紐が解けてどこかへ引つかゝり、よろ／＼と私に倒れかゝりました。私はそれを支へて靴紐が解けて居りますと云つて、結んであげませうと云ひましたら、扉を片手に私の胸先へ、靴の足を突き出しました。私は之に會釋して丹念に結んであげ、尙輕き挨拶を致しました。流石商館の番頭さんも、私の此の眞摯な態度を多少感んじて呉れましたか、有難う上山又來なさいと微笑で其のまゝ出て行きました。

此時の私の感んじ、其嬉しき只今でもよう忘れません。自分の店へ入社した時、當時の自分の氣持はどんな感んじがしたかと思ふと、社員の者へ問ふて見る。新入の社員には今も時々此の事を話して、忍耐の體驗を得せしめる事にして居りますが、私が其時位うれしき事はなかつたのであります。夫れは何れの商館に行つても、怒られるか嫌な顔を見せられる計りで、終に一度も笑顔等見せて呉れた事はない處が、其時ばかりは此の眼の大きな中川さんは顔一杯微笑して、有難う又來なさいと云はれし時の其の表情は、迎も忘れられぬ嬉しい事でありまし

た。餘事ではありますが、此處で一寸申上げます。此の頃の商館はおやしき／＼と申しまして一格高く普通商人を見る事、奴隷の如く随つて商館番頭と云へば、随分見識を持つてをりまして、又商館へは勝手に出入りを許しませず、大阪にては武田さんとか、田邊さんとか、鹽野さん等に限られてありました。斯様な處へ土人擬への田舎者、彼等の嫌がるのも無理からぬ事と思ひます。

併し氣質も時には買つて下さる方もありまして、此處にいらつしやる楠瀬さん以前、鈴木王國の大番頭金子直吉さんには、上山は熱心な忍耐の強い人なりと褒めて居つたと云ふ事を、誰かに話されて居つたと云ふ事を又聞き致しまして、蔭乍ら、今も感謝を致してをる事であります。その頃私の所から大阪へ行くのに、時間は相當かかりました。船は三日目又は四日目に一度位い箕島港へ寄港する。夫も冬なんか、みぞれや雪に打たれ毛布を被つて沖合に待つてゐなければならず、時には時化にて寄航しながら、艇より乗り移れず、そのまゝ直航さるゝ等等、随分辛かつたものです。處が又來いよ此の一言が迎も忘れられず、其の日を待ちかねて、神戸に参りましたが、幸にも中川さんは在館で早速お目にかゝりました。中川さんは今度は機嫌よく私の云ふ事を聞いて呉れまして、夫れは米國へ問合せやらん事はないが、併し聞き合すに、電報料が二十圓要ると云ひました。その頃の二十圓が私に取つては大金でして、又餘り見込もない様の口裏でもありまして一寸考へましたが、併し他の商館へは何邊行つても相手にしてくれる所ありませんので、又一面此の電報料にてへこまさんと云ふ様の氣配も見えましたので、よろしい出しますと奮發して頼みました。それで電報は打つて頂いたのです。之が今日何千萬圓

かの除蟲菊の大量輸出の奇しき手掛り、販路開拓の緒となつたのであります。

こんな話は今日の場合、お聞き頂いた所が何の用にも立ちませんが、日本商人も外商の爲に斯くも壓迫せられてゐたと云ふ生きた歴史にはなりませう。

私が商館を説きに廻つた時に、日本には此の除蟲菊は地味に適當する故、一貫目五十錢でも栽培して、まだ利益があると云ふ事を云ひましたが、之は一つの方便であります、兎に角さう云つて廻つたのであります。處が商館の中には一貫目五十錢で賣ると云ふが、契約すると云へば應じるのかと揶揄する商館はありました。

よろしい契約致しますと躊躇なく答へました。夫れは五十錢でも其の當時賣れずに、花は相當あつたのであります。併し先方は本當に買氣でなきもの、當方を駆引きと見ての事を知りました。私は之に一寸鎌を掛けて、私の聞いて居りますには、アメリカにては菊は一貫目五圓で賣買さるゝとの事、今日の五十錢のものを私と特約しまして菊を私の方から一手に買へば、大變の金儲けになるではありませんぬかと申しましたが、他の仕事をして相手にして呉れませんでした。併し之れはよき方便だと思つて説いて廻りましたが、夫でもどの商館も耳をかしてくれませんでした。その中前に中川さんに依頼してあつた返事が御座いました。それに勢を得ましたが、次いで他の商館からも問合せが御座いました。尙私の嬉しかつた事は、先に商館を廻つた時、自分の説を少しも聞いてくれなかつた様でありましたが、實は聞かぬ顔して内々本國へ照會してあつたと見え、其後段々私の方へ照會が御座いました。聞かん様な顔をして聞いて居つたと見えます。(哄笑)中にはアメリカ本國に菊がありますので

そんな事を館主に云へなかつたと云ふ人もあつたと云ふ事を聞かされました所が、此方から安い五十錢、七十錢で賣られると云ふ事を、彼方でも宣傳した爲め、彼方では除蟲菊の栽培に俄然恐慌が起りました。

アメリカの百姓は日本の様にゆとりがなく、氣が短いから、又他に有利な作物はありますから、コリヤ敵はんと見て除蟲菊を引き抜いてしまつたので、アメリカの除蟲菊は殆んど此の時絶えまして、只今ではカルフォルニアの一部に残つてゐるだけで、他は殆んど絶滅したのであります。兎に角日本に五十錢であると云ふ事のためにアメリカ相場は下落致しました。

明治三十九年にはアメリカは大下落で一貫目二圓八十錢になりましたので、此時私が神戸江戸町百四番カールローテ商館より、逆にアメリカ品を買ひまして輸入しました。その番頭は前田奈良三郎と云ふ方で御座いました。此の前田と云ふ人は神戸ばかりでなく、日本外國商館の番頭中の大立物で連も人格者で御座いました。その方が除蟲菊の權威者であつたので御座います。前田さんは其後京都で染料店を開いて、只今も現存して居る筈です。其後私は一、二度お會ひ致しました。先きの安價の除蟲菊は海外へ輸出されました爲、内地は却つて品物が拂底致して來まして大暴騰を來し、其處へ軍用のお買上げがありましたので、一躍五圓、六圓にもなりました。私は軍用を一手に受けまして納入しましたのは、文獻にあります通り一貫目五圓八十錢でありました。此の事は米國では少しも知りませんでしたので、かやうな譯で米國は日本の除蟲菊の安價に吃驚して暴落、日本は輸出と軍用の買上げにて暴騰、此の機を捕へて米國よりカールローテを経て、再三輸入を繰返して連もの勝利を得まし

た。貿易と云ふものはこんなに儲かるものかと、商賣で利益杯した事のない田舎の猿さんは、そろ／＼自分の智慧で儲けた様自惚れを出し來り、テナコテンの木綿着に尻端折つて、商館を訪問せし事我ながらおかしく思ひました。(哄笑)此の思ひもよらぬそらばん違ひ、けた違ひの儲けは、あまり何處でも致しませんでした。それから一回二回と逆に輸入をして居りましたが、其の頃アメリカにはバルチモアやベオリア等の外人は、皆此方へ原料を賣つてしまつて、自分の所にすつかりなくなつてしまひました。始めは此方から安く行つたので米國の除蟲菊が倒れてしまひ、次にはどん／＼輸入しましたので、向ふの製造家は自分の所の製品に原料の差支へると云ふ事になり、又日本の菊を買ふ様になりました。かう云ふトツチンカンを繰り返してゐる内に、日本の菊の輸出と云ふものは本格的の輸出品になつたわけで御座います。前には栽培奨励、生産過剰となり、責任を問はれんとせる憂目に遇ひ、夫れが種々の動機で輸出となり、今日の盛況に至りし事、聊か感無量ものはあります。

尙此の除蟲菊の輸出経路は種々ありますが、其後神戸の播磨町にマツケー商會と云ふ英國人で、米國貿易をする人がありました。之は私の菊の海外輸出の當時のエゼントでありましたが、日本人を侮蔑する英國人氣質、當方を侮蔑商道德を無視して、大阪平之町の小西嘉兵衛と云ふブローカーと取引を始めました。夫れで私は之れと大競争を致しました。小高さん杯は此の頃神戸にて賣込みに奔走されました。所が此のマツケーと云ふ人にゼムス、マツケーとか云ふ息子がいました。親マツケーに反對して同族でありながら、自分で別に菊の商賣を始めました。親マツケーを神戸市場より放逐する迄、之を利用し悪戦苦闘死力を盡して終に全勝、彼れマツケーは

旗を卷いて本國へ歸りました。此の間紐育にカリヤと云ふのがありまして、之れは薄荷除蟲菊の草分けの商人で此の人は私の遣り方に大に共鳴應援せられ、終に私の紐育出張所の主任となり、今日に至り尙繼續してあるのです。折柄長男は學校を出て歸へり來り専ら輸出の衝に當り呉れましたので、私は之れにて一切を長男に託したのであります。此の事は只今のヤング小高氏は略々御承知の事と存じます。

序に一寸御聞き戴きたいのは歐米人は商道德に厚い、日本人はどうも道義に薄いと云ふ事を、其頃常に聞かされましたが、時は大正九年であります。世界戦争物價騰貴の餘波を享けて、菊は一貫目時價三圓より一躍十五圓餘りになりました。稍／＼降りて八圓五十錢の時、ベオリアへ二百萬賣約しました。其後漸落元値段近くになり、相當多額の差を生じたので、彼れベオリアは不道德にもプロンプト、シツプメントを口實にクレームを附けキャンセルを申して來ました。信用状はなかつたのですが、當方は從來屢々犠牲を拂ひ來りし事、商道德は一旦契約成立の上は相場の騰落により、變更するものに非すと云ふ事を建前として、諄々契約履行を説明、海商商法の權威市村博士、住友銀行今村紐育支店長をも煩はし、年餘に亘り百數十回の電信交渉を重ねて、終に彼れベオリアを屈服せしめ勝利を得ました。斯様の事は申上ぐる要なきも、他に之れと同様の事屢々あり、歐米人の表面の道徳、之れにても窺ひ得らるべく、又マツケー商會との關係を聯想、御参考迄申上げる事に致します。

話は變はりますが、夫れから除蟲菊の栽培の事であります。前申し上げました様に、最初の頃は植物界の寵兒

であつたのであります。地方にては曾て商賣抔した事のなき田舎の田地持の旦那さんは、俄に除蟲菊の種屋となる。夫は一合五圓一斗五百圓もする事、之を縮緬や羽二重の帛紗に包んで賣り歩く、一畝歩の播種で、二斗千圓を得る。又一反歩栽培して二十五貫（當時は蕾花を摘む爲め現時の如く四十貫、五十貫抔の收穫はなかつた。）一貫目五圓として百二十五圓一作にして畑代三反四反を得る。（一反三十圓位）等々寄ると觸はると除蟲菊の話し夫は逆もの騒ぎ方之は中國に移り、北海道に次ぎ／＼移りて、終に今の産額になりしは、一般御承知の事で御座います。併し供給不足で暴騰となり、生産過剰で無代同様となる。是等は天産物の常として、一般狐草と稱せるも之れは米國にあつても同様の事あり、ケニヤも亦此の轍を踏む事と思はれます。

それから蚊取線香の事で御座います。之は私に運命づけられてあつたと見えて、明治二十一年に既に私は之を拵へました。之には確かな記録があるのであります。之は私は本郷の西片町の石川屋と云ふ旅館に下宿してゐる時に、伊藤と云ふ線香屋の息子と同宿、竹の筒の底に穴をあけて、蚊取線香を作つた事が御座います。その模型が今でも残つて居ります。其の人かは知りませんが、其後小石川柳町の伊藤と云ふ方より線香用として、のみと粉の申込みを受けし文獻はあります。尤もその時は栽培の除蟲菊より作つたのでは御座いませぬ。銀座の丸八からのみどり粉を買つて作つたのですが、明治二十八年には自分の家に栽培した除蟲菊で試製致しましたので御座います。

明治三十五、六年の頃でありましたが、年號はしかと覚えませぬが、堺の水島と云ふ人が蚊取線香にヤブコージと云ふものを入れ、特許を得ました。私の方はみかんの皮を中へ入れて、特許の出願しました所が、特許局ではみかんの皮は一般に蚊いぶしとして日常に使はれてゐるものだから、特許にはならないと云つて却下されてしまひました、私の方からヤブコージは害蟲に對して何等の效のないものであると抗議を致しました。

其後蚊取線香は自分が始めたと云ふ人が二、三人も飛び出して來たのですが、特許局の文獻が出て來ましたので皆静まつてしまひました。その時に道修町二丁目にゐました上仲と云ふ人が仲裁に入りまして、線香の特許の事については和解をしたのであります。

それからこの線香を實地につくると云ふ事については、とても苦勞をしたものです。最初は糊粉の合せ方が知りませんので、それを堺の線香屋へいつて覚え様と、今は或る會社の職人になつて居りますが、江川某と云ふものを無給で堺の小島某と云ふ線香屋へ行かしました。給料を出してやつて線香のつくり方を覚えさせにやりました處が、一月も二月もたつてどうだ覺えたかと云ふと覺えてゐない、毎日／＼線香をかついで二階へ上つたり下つたりするばかりで、一寸も教へてくれませんと云ふので、我慢が出来ず線香屋へ線香の製法を教へて下さいと云はしめました處が、その線香屋さんの云ふのには、馬鹿云ふな手前は他人の線香製法の祕密を取りに來たのぢやないかと怒鳴られました其のまゝ追ひ出されました。普通の線香でも製法は祕密になつてゐる。同業者はお互

にそれを探らうとしてゐたらしいですが、この爲ひどい目に遇はされて、這々の態で歸つて來ました。何故堺の線香屋に線香の製造を頼まぬかと云ふと、線香にのみ取粉を加へて蚊取線香を製造すると云ふ事を眞似られては困るので、内密にやつたのであります處が、果して堺の種田さんと云ふ人が之を感じまして、向ふは線香屋だからお手の物で直ぐ拵へる様になり、大に各地へ賣り込まれました。

販賣に就ては向ふの方に一時先鞭をつけられましたが、其の後私の方に商權が回復したので矢張り今日の様になつて居ります。

除蟲菊花の實際の輸出の始めは、明治三十一年で米國サンフランシスコ領事の陸奥廣吉伯の斡旋によつて始めて海外に販賣したと云ふ事が文獻にありますので御座います。この頃はまた除蟲菊は頗る幼稚で花の産額として僅少で頗る小規模のものであります。

安住さんがのみ取粉屋を開業するからと云つて、原料の花を買ひに私の所へ御見えになりました、私は始めてお目にかゝりました。今日は大きくなつて居られますが、その頃はお互に小さかつたやうで御座いますね。私もその頃は小さな家に住んで居りました、安住さんに氣恥しい様な氣持がしたので御座います。その折の記録を見ますと、その時に安住さんのおつしやるには、のみ取粉をやつてみようと思ふ。それで花をわけてくれぬか云つて、私の宅へ來られたので御座いました。それは明治三十年三月十九日で御座いました。その時は花を四貫目を

一貫目六圓五十錢で買つて戴きました。安住さんは今日は大變成功された事ですが、その當時はまだくでし。丁度太閤さんが百姓から關白になつた様なものだと思ふので御座います。

その時に五圓の手金を頂いて、品物は湯淺より送つて呉れ、殘金は湯淺の勘定にて貰つて呉れとの事で、六月五日に頂いた事になつて居ります。

次は同年の四月十八日、これは濱中の森龜と云ふ旅館の主人を代理にして、その時は二貫目で十三圓頂いて居ります。只今の何十萬貫、何百萬貫と比べて見て、全く今昔の感に堪へぬのであります。

次は三十三年一月十二日、之は百貫目を買つて頂いて居ります。今の百貫目二百貫目とは物指の臺が違ひます故、相當の大金であります。

凡ては今とは臺違ひで御座います。安住さんの注文が二貫から僅かの間に百貫になつたと云ふ事は、長足の進歩であります。此の頃は新町通りに田知本氏、伏見町の清水氏等相當有力なる當業者はありましたが、之等に超越して今日の大をなしたのは、流石に其の時より偉才であつたと、追想感服致して居ります。

夫れに就きまして安住さんが御自身で覺えて居らつしやるかどうか知りませんが、立派な煙草入れの筒を持

つてゐられまして、それを私に見よとの謎でありませうか、頻りに膝前にお出しになつていちぢつて居られる。夫れは萩に猪を彫り込んだ象牙の筒でありました。その頃はこんな立派な筒を持つてゐる人はめつたにありません。多分御自慢の品でしたのでしよう。私としては何とえらいものを持つてゐると驚いたものです。今から見たらおかしい事ですがそんな事も覚えてゐるので御座います。

餘談で御座いますが紀州蜜柑も明治二十年に、アーモア氏の手によつて米國に出しました。これ又販路開拓に相當困難致しました。それは何かと云ふとその時分に有田蜜柑は大部分東京に出して居りましたから、海外に出せといくら云つても中々さう急に行きませんでした。何故かと云へば有田蜜柑には二百年の歴史を持ち、明治維新まで役員は名字帯刀を許さるゝと云ふ様な有力なる組合が御座いまして、その組合の役員が東京と連絡がありますから、海外へ蜜柑を出すに東京の間屋扱の數量が尠くなるからと云ふ譯で、中々反對で思ふ様に行かなかつたのであります。無論何も役員の方は自分の勝手をしたいと云ふ譯ではありませぬ。有田蜜柑は特別に品質はよろしい東京に供給すべきものである。随つて東京の間屋の感情をそこねたら委託販賣の事故安く賣られると云ふ建前、私はそんな小さな考をしては駄目である。

今にも生産過剩、捌口はなくなると云ふ主張が、其後恰度五十年目の昭和十四年に紀州蜜柑同業組合から、海

外に日本の蜜柑と云ふものの聲價を高めたと云ふものは、全く上山であると云つて表彰されまして記念品を頂きました。

又之と同時に除蟲菊も丁度五十年目の昭和十三年に故郷の保田村の村會の決議によつて、私の壽像を有田郡の須佐神社の外苑に建て、頂く事になり、和歌山縣知事初め全國の同業者より賛同下さいまして、現に着手されもう殆んど出来上つてゐるので御座います。

それからのみ取粉の内地の最初の販賣者は、伏見町の清水多三郎と云ふ人で、最初は此人と提携してやつたので御座います。

この人は或る事情の爲、氣の毒にも不慮に逝去されましたが、同氏は明治十二年に獨逸のリーデル會社ののみ取粉を輸入したのが、我が國のみ取粉の輸入元祖であります。

清水氏は明治十九年に獨逸のモルフ商會から除蟲菊の種を取りまして、之を北區空心町の屋敷跡に蒔いて居りました事も、私は行つて見て居ります。同氣相求めるとでも申しませうが、この人が私と意志相通じてアーモア氏とも一處に和合になりました。江戸堀南通り鐵橋南詰に井上吉太郎と云ふ舶來煙草輸入商人がありまして、この人が私と懇意であつた爲、ここでもしばしば會合致しました。

アーモア氏は明治二十一年に再び私を訪問されました。その當時和歌山縣名草郡榮谷村に、貴志豊稷と云ふ人がありました。この人は私の宅をア氏と一緒に訪問されましたが、此人もア氏と苗の交換を致したので御座います。

この時は蜜柑の枝を全部切り捨て、株を石油箱に植ゑて専ら蜜柑の苗を彼に送りました。又同氏の隣家に西川民衛門と云ふ人が御座いました。この西川民衛門と云ふ人がア氏からことづかつて来たこと云つて、赤花の除蟲菊苗を持つて来て呉れました。之は明治二十一年の事で御座いました。相當年月も経てゐるので御座いますので除蟲菊の文献調査の時に更に明瞭のものもあるべく、又他に記憶を引き起す面白きものもあらんかと思つて好奇心に駆られて、昭和十二年に貴志豊稷さんのお宅を訪問しましたが、西川さんは生存して居りまして、同氏は明治二十年アーモア氏に随従して氏の農園で働いて歸へつて来たこと事でありました處が、話を進めて段々聞いて見ると當人の名は太右衛門と云つて民衛門ではないのであります。

然し之は誠に變な事どうも不思議で如何に言葉の音が似て居ても、私の家へ来た時の名詞に民右衛門と書いてア氏より赤菊苗外の種ものとの送状はあります。自分の名を間違へる筈はないと考へて、更に調査しましたら民右衛門で、六十餘才の時に訪問をしたと云ふ事が明らかになつたので御座います。随つてベルシヤ種赤菊の渡來したのは明治二十一年であると云ふ事は確かにわかつたのであります。

之から東京麻布に學農社と云ふ種子屋があり、駒込追分町に勸農園渡瀬寅次郎と云ふ方があつた。そこへも送りましたが、此の記録が私の方に御座います。興農園は相當大きな種屋さんと見え、種子五斗一斗六十圓替にて、三百圓送金された記録はあります。ア氏と知人になりましたのは、前にも述べました様に福澤翁の所へ來ました。ア氏の歡心を買ふ爲に、その頃私は貧書生であつたので、アメリカへ行つたら金儲けも出来るかも知れないと眞剣にア氏にサービスをしたのであります。大體外國人は日本人の様に少々のサービスでは、餘りこたへないので御座いますが、(哄笑)幸にもア氏は果樹蔬菜園藝植物の輸出入が本業で、そのかたはら日本の蜜柑をアメリカへ輸入し様と云ふ氣持がありました爲に、却つて私を迎合する有様でした。そのために當時は居留地外の旅行が禁止せられてゐるにも拘らず、私の方を内密で來訪されました。

私は明治十六年に單身郷家を抜けて出て、東京へ行つたので御座います。紀州の片田舎から東京迄行くものは丁度只今の社會主義者の様にみられ、なか／＼親の許がありませんでした。その爲親の感情を害し一時學資を絶たれて、非常に苦心を致したので御座います。之については色々の事もあるのですが、又々聞いて頂きます。この間に非常な苦心努力を致しまして兎に角不十分ながら今日迄に仕上げて來たのであります。

聊か脱線致しましたが除蟲菊の加工で御座いますが、之につきまして最初に一寸お聞きして頂きたい事が御座

います。それは明治二十一、二年の事ではありますが、花の産額として附近のものを取纏めても、頗る僅少で御座いました。之を手廻しの石臼で、菊の花を粉にしましたので御座います。之から乾燥機と云ひましても、お茶を焙する小さな紙を張つたものを、箱火鉢の上のせましてそれに二つの引出しをつけ、それで乾しました。

一日に一貫か八百匁足らずのもので御座いました處が、此の石臼を改良致しまして、大形のものに致しました。今もこの時の石臼が澤山ありますので、記念の爲に自分の庭園に幾つも幾つも置いてあります。製粉進歩の経路は此の手廻し臼から踏臼になり、水車となり、電動機となつたのであります。

明治四十三年に始めて本式の製粉工場を建設、電力使用と云ふ事になつたのであります。之が除蟲菊の製粉機械の我國最初のもので御座います。依つて之を記念する爲、此の機械に一棟をあて、組立て、其儘之を使用せず注連繩を張り、毎元旦に飾り附をして、元形そのまゝ記念に致してあります。若い達は十分使用に堪へるもの而も一棟を塞いで死蔵するのは、餘りにも頑強でなきやとの忠告もされますが、此の機械は頗る完全にして今尙改良の餘地なく、當業者の手本として相當の貢獻をなしつつある事、此のまゝにして一廉の役立ちつゝある事、自分の死ぬまで先づ此のまゝ置いて下さいと云つて、記念に置いて居ります。夫れは只今一般の使用される連絡臼といふ製粉機の始のものであります。汲み上げの所丈けで他は變つてないのであります。

夫れから此の胴搗の棒にカップリングと云ふのがあります。下にある杵先が此のカップリングの一端を跳ね上げるによつて、其の尖端が自然に廻轉臼底の粉を自働に攪拌する等々、斯業の上に相當貢獻してゐると思ひます。尙苦心の一として杵先きと、シャフトと分離し得る様する事は最も必要な條件の一であつたのを、苦心中偶々誤つてシャフトの尖端一分許り短く、穴底に融通されあつた事は奇績的に成功の資となつたのであります。

夫れから線香機械の事であります。最初は木の臼にて其の一方を挺子にて締め付け押し出し、一人は線香を切り取る。而も此の木臼の製造職人は堺市に唯一人よりなかつたと云ふ貧弱さであつたのであります。夫れは壓搾機に進歩させたのであります。

又渦巻線香之は最初には迎も苦心したのであります。乾燥さすには二週間も掛りまして、而も板に附けると腐つて板に喰ひ付き、尙之れにても製作期間は寒中數ヶ月間より出来ませんでした。

其處で考へまして此の線香板の代りに、金網を用ゆる事に成功したのであります。此の金網を用ひましたのは私の家内の考案で御座います。之が何でもない事の様に見えますが、非常なる價值のある事と思ひます。二週間かかつたものが、一週間で出来ること云ふ事はとても大した發見で御座います。

又今迄僅か四、五ヶ月しか出来なかつたものが、殆んど一年ぶつ通しでやれること云ふ事は、迎も大した工業的利益で、此點家内に敬意を拂つてゐるので御座います。渦巻蚊取線香の今日の發達を來したのは、此の金網にあ

ると申上げて過言ではなからうかと思つて居るので御座います。それから私は此の蚊取線香の乾燥法に就いてより以上の時間を縮少する事に没頭致しまして、百尺竿頭一步を進めまして、前に一週間のものを只今は之を二十時間につめる事と致してあります。尙之を更に進めて十分間、五分間にしやうと思つて努力して居るので御座います。

私の工場で百萬梱の設備は昨今殆んど出来てあります故、之が完成の上は内地は全然目的とせず、平和克服を待つて世界市場に販路擴張する事となつてをります。

私は老齢で今は商賣の事は一切致しません。

ひたすら除蟲菊事業の發展を願ふだけで御座います。除蟲菊加工は石臼から始めて今日迄やつて、相當の體驗を持つてゐますので、この線香の製法を何處迄早く出来るかと云ふ事に興味を持つて、尙餘生を此研究に捧げつあるので御座います。又除蟲菊輸入については、私より先に長興衛生局長があります。併之はコッポ博士を通じて、獨逸から輸入したのであります。又文獻を調べました所が、長井長義博士も獨逸から輸入したとありました。之は駒場の農學校に栽培された。然し之等は學術用や試験用で一時のもので御座いました。

此の外に玉利喜造博士の米國より、田中芳男氏の海外より取寄せられた記録、又明治十九年に農商務省がオーストリアの種子を取寄せ之を紀州から四國、中國、九州方面へ送られた文獻はありますが、當時の事とて之を顧みるものは御座いませんでした。

只和歌山の縣廳小使に和田辰五郎と云ふ人が御座いました。之は各有志に配布すべき種子を自分の住居の裏へ蒔いたのであります。當時和田の家は頗るみじめな借屋住居で、ガラス箱の中に一文菓子を並べてゐたもので、御座いましたが、その家の裏に安井と云ふ豪農の荒廢地がありました。その空地面に種を蒔きまして、その苗を高價に賣りまして大金を儲けまして、俄かに別荘を建て僅かの間に資産家になりました。併し其後斯業の騰落に直面して終にあわれな最後をとげたので御座ります。

それから品種の事で御座いますが、之は自分の知つてゐる範圍では、米國種とオーストリアの二種であります。米國から來たものは葉が厚くして廣いのであります。オーストリアの方の葉は細かい事になつて居ります。そして切込みが深くなつて居ります。葉の細い方は花着きも多い様、又咲くのも早い様思はれましたので、最初の頃は生産が少いために之を區別致しましたが、今はメチャクになつてしまひました。尙最初は花の早咲を必要と致しましたので、多くの株の中から早く飛び咲きしものを目印をつけておいて、次から次へと繰り返したので後には一週間位花は早く而も稍一齊に開きましたが、今はこの早咲の必要がありません。又種類としては例のペルシヤ種即ち今の赤花であります。之には桃色と赤色の二種御座いますが、製粉としては黒くなつて、又收穫も少く問題にはなりません。只だ私は此の赤花は明治二十一年にアーモア氏が、態々西川民右衛門をして齎らしたと云ふ因縁にて、之を記念する爲に當時よりずっと繼續して今尙相當植ゑて居りますが、切り花にもならず、聊か

持て餘してあるのであります。

三二

製品の海外輸出にも相当努力しました。私はウラヂオストックへ明治三十九年に支店を開設しました。その頃安住さんの除蟲菊粉は、浦鹽の支那人間に「チュー／＼」と云つて（豚と云ふ意味らしい）相當賣れて居りました。幸ひ自分は出張して居るので、豚印同様に賣らんとしても、夫れはなか／＼支那人と云ふものは、一度信用したらどうしても、それを崩す事は出来ませんでした。こゝで一才安住さんだけに申上げますが、粉の内にかたまりし物がありました。其の小罐の粉の固りあるものは、粗悪品として嫌がつて居りました。チューは近頃品物はわるくなつたと、折角の商標を崩しかけて居りました。之は既によく御承知でしょうが、小罐に詰めた粉は一年か二年立ちますと、效能がなくなりませんが、併し之を火にかけて手でもみますと、更に有効になりますね。それから海外販路擴張の事であります。支那は勿論早くから一年二、三回は社員が巡視してゐますが、大正三年七月二十日には外國語學校露語科卒業の甲斐直喜をモスコへ、又米國のブロードウエーに出張所を設けて、米人カリヤを支配人としました。

大正十五年には長男勘太郎が、世界視察に。

昭和九年には猪子澤助をイラン、イラクへ。

昭和十一年にはケニヤの除蟲菊を研究さす爲福島高商卒業の關口倉吉を派遣しました。途中ボンベイで病氣のため逝去しました。

・日本除蟲菊の輸出に就きましては、只今では其の約六割は私の方で占めて居ります。

南米の方は大阪外國語學校西班牙語科卒業の山本厚と云ふものをチリに派遣最早や三年になつて居ります。かうして除蟲菊製品の販路開拓についても、相當苦勞を致して居るので御座います。

こゝに一寸御覽になつて頂きたいのは、除蟲菊の發祥の記録で御座います。之は方々に飛び飛びになつて居りますが、明治二十一、二年からのもので御座います。此の中に岡山の渡邊小平太の名も載つて御座います。

第二の帳面は二十二年にアーモアから送つて來たものです。一緒に瓜の種が六種來て居ります。

元國立園藝試験場長恩田博士が來訪され、之を御覽になつて、その時分こんなものが來て居つたといふ事は、非常に珍らしい事だと云はれたので御座います。とに角此の小さい私の手帳は祠をつくつて、その中へ納める事になつてゐるのを、今日は持つて來たので御座います。

こゝらでお話を切り上げます。どうも老人の繰り言でつまらん事を長々とお聞き頂いて恐縮で御座いました。

土屋 副社長

どうも大變長く有難う御座いました。御苦心の點もありますし、種々面白いこともありました。只今のお話の

三三

なかに安住さんのお名前がしばしば出てまゐりましたがどうか安住さんにつ……。

安住伊三郎氏

本日は日本輸出農産物株式會社御主催の下に薄荷と除蟲菊の座談會を催されまして、私の如き老骨を御招き下され、所見を述ぶる事は深く感謝し、且つ光榮とする所で御座います。

私は明治二十六年獨立開業致しまして、除蟲菊製品の製造販賣に従事致したのであります。

其の當時は獨逸からリーデル會社の粉末を道修町の輸入問屋が輸入し我々は其處から引取つて小分けをし、私は猪印のみどり粉と命名して販賣に着手したのであります。

大阪衛生試験所の技師であつた製藥學士村井純之助氏の説には、明治十八年埃國ダルマチャより種子を農商務省が取寄せられたが、芽生えないで翌十九年再び輸入して、同省から各府縣に種子を頒布し、第一に生産したのが紀州と大阪の桃山で、夫れから岡山、香川、愛媛、山口、北海道、長崎の各府縣に栽培さるゝに至りました。

上山さんも本品の栽培には努力された様ですが、私は香川、愛媛の地方にパンフレットを配り、同縣各地に出張して、優良除蟲菊花採收奨勵の爲、各部落の寺院に農家を招集し講演會を開き、優等品の栽培家には木杯に賞状を贈呈して激勵した事もありました。亦長崎縣の對州五島地方に小冊子を配送しました。日本品が追ひ々數

量が殖えて來ましたので、斷然輸入を中止しまして、西洋品崇拜の其頃日本産なるが故に優良なりと、明治三十年の頃宣傳に努めたのであります。其當時は清水桂林堂さんが獨逸品を輸入して居られたわけで、日本では製造家は無かつたのでした。

上山さんは先刻アメリカには相當除蟲菊が出來たが、終に自滅してしまつた。アフリカのケニヤが近來相當栽培されて居りますが、ケニヤも米國と同様自滅するものと見て居られますが、私は見解を異にして居るのであります。由來米國は一面平坦の大原野でありますが、ケニヤは下は熱帯で貳千呎の上は溫熱で水はけも良く土壤に適し、漸次其數量が増加して居りますのみか、ケニヤ總督は嚴重な法令を施し、組合を組織してABCと等級を附し、其以下の劣等品は廉價に買上げて焼き捨て、居ります。其證據にはケニヤから、米國紐育の市場に如上三種の見本を送り、原品とサンプルと毫も相違せぬ品が市場に現れるので、何時も日本品はABC以下の値段に居り而も日本産は現品を試験せねば商談が行はれぬとて、在紐育の原商務官から忠告の書面が來た事があります。私は除蟲菊製品の製造専門で、菊花の輸出に關係して居りませんが、外務省通商局から忠告された次第であります。先年外務省に御願ひ致しケニヤの種子土壤迄取寄せました次第ですが、ケニヤは年々増産を辿りつゝあれば、自滅すると思はれず多々益々増加するものと思ひます。

其後バルカン半島のブルガリヤに、又彼のナイル河の上流エチオピアの下流の沿岸にも近來産出致し、ブラジ

ル國では紀州からの移民が同國で栽培して居ると承りました。前條の次第で今後はケニヤのみでなく世界の國々に栽培さるゝに至るかど憂慮致して居ります。又最近中支の某地にも栽培し、見本を支那人が上海の私の工場に持つて來た事があります。

政府を攻撃するものではありませんが、私は往年農林省に出頭しまして、高橋政務次官と古川とか云ふ技師に面會しまして除蟲菊花の品質の改善栽培の取締り及獎勵に就き熱心に上申しました處、古川さんの言はるゝには目下研究中であると、又高橋政務次官は私は先年百合根の栽培で大失敗をした事がある、農作の事は容易の問題では無いと云はれました。如何にも研究はされて居りますが、眞に品質の改善には着手して居られないと考へられます。

近來學者間には同菊花は満開の時が一番ピレトリンの含有が多いと、一般に唱へられて居りますが、私は半開の時が良いと思ひます。何となれば半開の時、雨が二日も降りますと、何日の間にか満開になるのみか咲き過ぎる事があります。殊に本土に於いては梅雨期に開花し、麥と收穫が同じ頃でありますから、私は半開説を高調するのであります。ブラジルには私の知遇を得て居ります石射大使が駐在して居られますから、御依頼して同國の栽培状態を調べて見たいと思つて居ります。

恰度明治三十二年九月十二日(大阪南地今のルナパークの處に岡崎榮次郎さんの建てられた平屋の西洋館の商業俱樂部がありました)實業界の霸王として聲望の高かつた前田正名先生が御來阪になりました、我が日本は最早農業立國は進んで工業立國に進展せねばならぬ。我輩は度々歐米各國を視察するに、大阪京都邊の貿易家は見本と現品を違へ契約を守らず、退色破損し易き傷物を輸出して外人に不信用を受け、之れを直言すれば大阪、京都の貿易家は詐欺師であると云つても過言ではない。嘘だと思ふなら外國に出掛けて實際に視察せよと、随分猛烈な訓戒講演を聴かされ全く感激致しまして、遂に明治三十五年九月大阪を出發しまして、天津、北京、芝罘、大連、上海、蘇州、杭州、南京、漢口に至りました。北京に参りました處先づ公使館に、時の全權公使内田康哉氏を訪ねまして、南京蟲退治藥の擴張に來ましたと申しました處、我輩は藥のような事は分らぬ、城外の西海洋行の西君に行つて交渉せよと仰せられ、夫れから西君の處に参りますと、同氏の曰く南京蟲退治なぞチャンコロには必要は無い。日本人は私が一人此北京に居るだけだとケンもホロロに云ひ放たれました。處で日本人にビールやブドー酒を飲ませ洋服や洋藥を飲ませる様になつたのは誰が遣つたのだ、皆西洋人が宣傳して賣れる様にしたのだ。私が北京に來て南京蟲退治の藥を擴張するに何かあらんと云つたら、マー晝だ飯を喰べようと支那流の食事をよばれました。すると私は支那人は彩票乃ち富籤が好きだが、此藥に目ざまし時計とか、絹のハンカチとか、扇子とか抽籤で遣つたらどうだと提案せし處、夫れは面白い一番遣らうぢやないかと云ひ出し、支那の學者、を招いてトートー彩票付き大形のポスターを木版に彫り、翌年北京で實行しました處、大變の評判となり「野猪

「印臭蟲立斃藥粉」南京蟲退治藥として、北支に擴まりました原動力を造つたのであります。

三八

明治三十六年には大阪で第五回勸業博覽會がありましたので、支那朝野の人を迎接する爲め外遊は出来ませんでした。

明治三十七年に朝鮮八道に至り、同三十八年三月日露戰爭中陸軍大臣の特許を得まして、除蟲粉の全軍給與の許可を受けようと、同年三月十日大連に上陸しました。恰度此日が奉天陥落の日で只今迄陸軍記念日となつて居る事は皆さん御承知の次第であります。上陸以來旅順の要塞に至り、神尾遼東守備軍司令官に面會し、岩井藥劑正、日比木中佐等に同品全軍給與の請願を致しましたが、長官部會議で南京蟲退治以上の品でさへ否決したので迎も君の希望は駄目だと云はれ、失望して天津に出て、ハルヂースと云ふ六百噸のノルエーからチャターした商船會社船に乗つて、歸航の途中黄海で浮流水雷が流れて來て、目の先に見え當つたら船は眞二つに破れて海底に沈む處でありましたが、全く御神助で水雷は潮流の加減で彼方に流れ、乗組員や支那留學生も助つた事は今に忘るゝ事の出来ぬ次第であります。歸朝しましたのが、五月の初めで一週間ばかりすると、第四師團の經理部から除蟲菊粉が十萬七千封度要るが直ぐに出頭せよとの電話がかゝり、驚いて直ぐ出頭しました。値段は幾ら引受けるかと仰せられました。可なりのストックは有りますが、マア五萬封度位迄は御引受け致しませう。して値段は

と尋ねられましたから壹封度六拾貳錢ですと申上げましたら、夫れは高い他の業者は四拾八錢とか、五拾壹錢で見積りを出して居る、そんな馬鹿な値段は出せぬときめつけられました。純良の品は高くつくので安い値段の品は屹度混和物があると思ひます。そんな講釋を云ふな歸れと亦叱られました。併し見積り丈けは出して置けと云はれ、其の翌日大阪府から鼻引の人力車で屬官が見えまして、君の處で除蟲菊粉は一體何程ある乎と云はれ、三ヶ所の倉庫を開いて御覽に入れましたが、其翌日内務部長の折原さんから、直ぐ出頭せよと仰せられました。そして君の除蟲菊粉は値段が高いさうだがマカラヌかと仰せられましたので、夫れは品質が上等ですから高いので、他の混ぜ物を入れた劣等品とは違ひますと答へました。何とかならぬか、マカリませぬと御答へして歸りました處、又其翌日知事の面目にも關する大阪府下の専門家で、よう納めぬとあつてはと仰せられ、遂に五拾七錢に裁定されました。四萬七千封度納入致しました。處が滿洲の陣中で外の品は效力が薄弱であつたのに、安住大藥房の品々を納めた御蔭だと喜んだ事でした。夫れが抑々滿洲に安住の除蟲菊粉が擴まつた動機であります。夫れから西伯利亞のハバロウスクに、露國の極東博覽會が開かれ出品致しました處、露西亞人に歡迎され、浦鹽の協信洋行を代理店とし、西伯利亞に擴張しました處、カバン・ポロシヨウクと云つて猪印の粉末と露國人に賞識されました、可なり大量の輸出がありました。歐洲大戰の大正五年頃から全部數萬個の小包で輸出して來ましたが、しまいには其多數の小包が何處に行つたか分らぬ様になりまして、數萬圓の損失を招いた事もありました。

三九

明治三十九年には大阪製薬同業組合の代表者として、新嘉坡、馬來、彼南、スマトラ、爪哇等に渡航して、本品の販路擴張に努力し、亦爪哇のバンドンに入りて、親しくオランダ政府經營のキニーネの製造工場を視察して歸朝して報告しましたのが動機となりまして、武田長兵衛氏は同地に一大工場を設立され、日本に其製品を輸入し世界の市場に輸出される様になりました。

爪哇に定期航路なきは我國の損害なりと、歸朝後（四十年二月）農商務省に四十八頁の意見書を提出し、夫れが動機で明治四十三年南洋郵船株式會社の設立となり、爾來南洋貿易は意外の發達を遂げ、明治四十年頃壹千萬圓以下の輸出額は、歐洲大戰から昭和の十年頃には壹億七八千圓迄も登りました事は本懐の至であります。

明治四十三年には墨西哥國獨立百年祭に當り、日本品博覽會の開催となり、僅か百圓の小遣ひを協會より貰つて國家的犠牲となりて、同年七月同國に渡航し、メヒカナ市に九十日間出品滞留して、毎朝マーケットに西文の引札を配布し、安住かとり線香、除蟲菊粉の宣傳に努め販路を擴大致し、大阪商品を同國人に知らしめ、日墨貿易を旺益ならしめた事は此時からであります。

大正四年露本國に自家の除蟲菊粉を更に擴張せんと、モスクワ、ペテログラードに至り、本品の擴張と戰時露國の經濟状態を調査し、ココツオフ露日協會の總裁に面談して、西伯利亞鐵道運賃の引下げの談判を致しました。

大正十二年露國農家庭工業博覽會出品總代として、同年七月にモスクワに渡航し、到着後一週間目に東京、横濱の大震災火災の電報に接し歸朝したのであります。

昭和二年一月泰國名譽領事任官答禮の爲め、同國を訪問し印度洋を経て古倫母に上陸し、エジプトのカイロ、アレキサンドリヤ、ギリシヤのアテネ、トルコ、ブルガリヤ、ルーマニヤ、伊太利亞、スイス、チエツコ、獨逸、英佛等に至りて除蟲菊製品の輸出策に努め、傍らバルカン航路研究に努力して歸朝致したのであります。

私は明治二十六年以來五十年の間、終始一貫微力を顧みず除蟲菊製品の製造と、海外輸出に専念致し、御蔭様で英獨大戰迄は世界の三十餘ヶ國に輸出を致す様になりました。幸ひに日本の模範商品だとして、外國で信用を博する様になりました。

大正九年十二月除蟲菊製品を率先海外に販路を開拓し、衆民の模範なりと仰せられまして、勅定の綠綬褒章を賜り、更に昭和十一年一月其功績著大なりとて、右に附する飾版御下賜の恩命に浴しました事は、身に餘る無上の光榮として、感謝感激致して居る次第であります。

從來輸出貿易商で盛に、原料其儘で輸出して居りましたが、私は常に製品として輸出すれば、副材料は勿論日本品であるし、工賃迄日本の収入になるが故に、今後は悉く製品として輸出すべきであると存じます。

斯くて除蟲菊品は五十年以上の長い歴史を経て、農家の努力と我々製造業者の奮發とにて、現今では約三百五十萬貫と云ふ大量を産出し、一大輸出品となりました事は、邦家の爲御同慶の至りであります。

安住かとり線香や除蟲菊の如き、同業者の内には折角私が開拓して來た地方に、横から粗製品を造り惡辣な競争をして、遂には良品の眞價を失墜した實例は澤山あります。

殊に大東亞共榮圏内には我々同業者一大會社を設立し、同志打ちを排除し、共同して第一線に起つべきであると、深く信じて疑はぬ處であります。

一向取止めもなき御話で御座いましたが、御清聴を煩はしました事を深く感謝致します。

土屋 副社長

除蟲菊につきましては、上山さん、安住さんからお話し頂きまして、種々と参考になりました。

今度は薄荷につきましては、矢澤さんから聞きたいと思ひます。どうぞお願ひします。

矢澤 藤太郎氏

薄荷につきましては、なか／＼權威者がお揃ひですから……。

この商賣を始めましたのは明治二十五年で御座いました。

私はその頃茂木商店に勤めて居りました。茂木商店とは横濱開港當時に開店した生絲賣込問屋でありまして、その業務と致します處は、製絲家に對し資金の前貸及荷爲替金受拂貸し、蠶絲委託販賣及金錢貸附業でありましたが、其の後大正八九年バニツク破綻整理中、不幸なる關東大震災の災厄にて、没落してしまひました。

當時の同店の店主は初代茂木總兵衛さんでありまして、その下に私と多勢吉太郎さん、(現多勢正平さんの御親父であります)とでありまして、多勢さんは山形縣の出身でありまして、實兄の親族は米澤では壹貳流の製絲家でありまして、多數の生絲を産出其の販賣を委託の爲野澤屋(茂木商店)に向け送荷して居りました。

其の荷主代理を兼ね入店、客席扱ひをなして居つたわけです。

その當時自分の係は、倉庫係り現物主任でありましたが、倉庫に薄荷が入つてゐて、それを多勢さんが外國人に賣らうと、苦心してゐることを知つて居りました。その薄荷と云ふのは、多勢さんの郷里山形縣(米澤及び天童)に産出して居つたので、製絲の傍ら取集め、外國人の購買に適するかどうか試みに送つて來てあつたもので當時原油(取卸油)の儘にて買入るゝものも稀でした。

當時の薄荷の仕入れ方法と申しますと、東京市上野驛より仙臺驛にて下車、曉着車の爲驛前定宿にて休憩後朝

食を認め、人力車を雇ひ早朝旅宿を出立して、仙臺市より北西に向け、愛子を経て作並迄六里半の行程で、此處は温泉湧出して近郷の者の湯治場です。此處にて仙臺よりの人力車を解雇し、改めて峠越しの人力車を雇ふ。先づ晝食旁々入浴休息、再び車上の人となり、作並より峠登り道、分水嶺關山隧道迄三里餘、同隧道を通過、下りにて關山宿迄二里半、同宿より東野を経て天童町迄約五里（天童は舊織田領にて、明治二十六年頃は人口壹千戸内外）の道程にて、天童町に到着する。同町は薄荷、養蠶等を主として、薄荷の仲買人は兼業にてやつて居りました。薄荷が行はれる前迄は、紅花の殖産もあつたが、漸減して薄荷と變つてしまつたと云ふ事です。

天童町及米澤方面での集荷は仲次人が行ひ、この仲次人と賣買をなし横濱市に送るわけです。出荷發送の順序と申しますと、山形市と米澤市との中間上の山宿、（温泉場です）より七ヶ宿を経て、奥羽線大河原驛迄馬背にて運搬、又米澤方面よりの品は都合にて、峠越をなし、白石驛迄同様馬背運搬、兩方とも日本鐵道株式會社の貨車に積込み、大河原驛白石驛發車本線經由、東京府下赤羽驛より山手線の新宿、目黒、品川を経て横濱驛着荷となる。原發より延着する場合にて、急を要する場合は大河原驛又は白石驛に店員を出張させ、驛長に懇談の上、最も近い操車驛より貨車の差繰りを依頼して、立會の上貨車に積込みし、同驛よりの發車を見定め歸店するやうな事もありました。

當時の荷造包装としては、容器は鉄力板製（石油空罐に等しき物です）この罐に正味四貫匁詰二罐を木箱に容れ、壹箱として四箱を以つて壹駄としました。賣買価格は壹駄（二百斤）何百圓也と云ふわけです。木箱は杉八

・寸赤味板（節無しを撰み）にて、武力罐二個を容れ、四方五寸位の空隙ある大きさを造り、其の罐を稻藁にて、やわら詰めとなし、繩掛は運搬の際に行ひ、其の後現今の如く石油の空箱、空罐を併用する様になりました。

自分が倉庫係をしてゐた關係で、薄荷についても不絶注意を拂つてゐて、其内容を聞知し興味をおぼえて居りました。明治二十二年秋頃ですが、その頃自分は都合上茂木商店を辭して居りましたが丁度その頃獨逸系の英人にて、コキングの愛妾の名義を以つて、郊外平沼（泥沼を埋立たる土地です）に石鹼を製造し、内地人に販賣して居る外商に、取卸油の購入方を勧めてゐる中に、再製（腦油分離粗製）方研究の事を知つて、多勢さんが、其研究を始むる爲自分も賛成して、自分の所有地内の倉庫の一部を製造場として使用するを承知して援助をなしました。そして自分の倉庫を製造場使用を承諾したと同時に、共同經營をしました。

當時は随分面白い話も御座いますが、一斤五圓のものが、二斤五圓で仕入れると云ふ事も御座いました。話に順序がありませんが、二十七年頃には同業者は私と小林さん、長岡さん、多勢さんのこの四人より他にありません。この四人がまあとにかく共同經營をする様になつたのであります。その當時大體産額が多すぎました。六萬斤そこ／＼のものを賣るのに、骨が折れました。結局その年は四萬五千斤位賣れましたが、残りは翌年へ持越したのであります。

明治二十五年春自分と多勢さんとは、自分等の使用人を派遣、北海道に薄荷苗を送つて栽培をなしましたが、時期尚早であつた爲と、派遣人の健康に關してうまく行かず、事業もはかばかしく行きませんでした。當時の栽培畑地は當時札幌製糖會社隣接裏地苗穂村三十番地にて、間口貳拾壹間、奥行百間の畑地でありました。(附録一参照)之が北海道の薄荷の元と思つて居ります。

自分は家政の都合で、多勢さんとの共同營業を中止しました。その結果小林桂助商店に謀り、他に作業場の經營を始めました。薄荷製造としては、それが同店の始めです。

自分は多勢さんと共同使用の倉庫を取毀つて、其の地跡に新規製造場を建設致しました。此の時二馬力五十封度のボイラーの使用許可を受け、蒸溜を主とし、溶解濾過等に對し、スチームの使用を始めました。他店では舊式ズク製茶釜式直火焚蒸溜釜を引續き使用して居りました。その當時薄荷製造販賣業を營んでゐたのは自分の處と小林さんの處のみでした。

その頃横濱に藥種貿易組合と云ふのが御座いまして、その組合では輸入藥品染料の取扱及び和漢藥品人蔘の販賣等をなして居りましたが、その主なる組合員で後の日本薄荷株式會社に關係した人々は、鳥居徳兵衛さん、友田嘉兵衛さん、大川佐兵衛さん、藤野善助さん、松村清吉さん、小林桂助さん(現主の御祖父です)長岡佐介さん、(本日御出席の長岡さんの御養父です)自分その他六七名です。

明治三十年でしたが、薄荷の商賣が面白いと云ふ處から、自分が使つて居りました野口彌文治と云ふ男が、六月資本金拾五萬圓(四分一拂込)の日本薄荷株式會社と云ふ會社を設立しました。自分が傍に居て會社の設立される迄知らなかつたのは、こちらがぼんやりして居つたのですが、その後援者に大谷嘉兵衛と云ふ人が居りました。その人は著名な人で、私とも一寸縁引になつて居りますが、明治初年當時より再製茶業に従事し、努力經營によつ漸次成功第一流の名士となつた人です。會社の設立許可を得てから知つたのでありますが、私は長岡さんの御先代と、先々代の小林さんも、一緒に大谷さんの所へ押かけて行きました。かう云ふ事になつたのはどう云ふわけだ。薄荷の商賣は範圍の狭いものである。特殊な商賣である。先輩としてかう云ふ事をされるとは、一寸穩かでないと云ふ事を三人、小林さん、長岡さん、私とが突込みました。處が向ふはこちらはそれ迄調査してなかつた、不行届であつた。然し會社はもう設立の運びとなつたから仕方がないと云ふ事になつたので、種々話しましたが、結局株式會社の重役になつてくれと云ふことに落着きました。重役になつても有難い事でもありませんが、そんな事だけりをつけた方がよいと思つて、重役の株(拂込は自己負擔)を持つたわけです。小林さんはそんなものを貰ふのは嫌ぢやと云つて斷られました。そんなことで會社が出来ました。

設立當時の役員としては、

取締役専務	藤野善助
同	友田嘉兵衛

取締役	矢澤藤太郎
同兼支配人	多勢吉太郎
監査役	松村清吉
同	柿沼海次郎
相談役	大谷嘉兵衛
同	大川佐兵衛
主事	宮崎彌文治

と云ふ顔觸でした。

野口彌文治と云ふ人は明治二十九年春迄自分の處に勤務して居りましたが、この會社設立の爲に退店したものです。同氏は藤野専務の妻君の實家宮崎家の女婿となつた爲、宮崎姓を名乗つたわけです。

この會社の營業の目的は、薄荷製造販賣及天産物人蔘等の委託販賣でした。

この會社は不幸にして、三十六年任意解散となりました。その失敗の原因と云ふのは對人蔘貸付爲替値下りと、薄荷販賣の困難（之は新規ブランド關係による）等によるのであります。

製造の経路はその當時私が仲買に使つてゐた、古塚（古塚さんは多勢吉太郎さんの實弟であります）と云ふ人

が、鈴木さんの製造の方を指導する爲に、二年ばかり神戸に来て居りました。私は三十六年に横濱から神戸へ来ました。

古塚さんは三十七・八年頃に神戸の鈴木工場より手傳ひに來ました。一年違ひで鈴木さんは三十七年に工場を開設しまして、所も同じ町の裏表に住んで居りまして、自然出會つたことになりました。是れは別事ですが、只今は家の製造の方は家内がやつて居ります。所謂共稼になつて居りますが、私は不幸にして波瀾曲折の多い身柄で御座いまして、製造の方は何時も苦心してやつて居りまして、だから製造と云ふ事は機密と云ふことは御座いませんが、急所を掴んで居ります。此急所を教へたのに私の身内は皆早死しまして教へるものが御座いません。店の者に教へてよいわけですが、野口彌文治さんの様な人が再び出て、反旗を翻すと云ふ危険がありますので、めつたに教へるわけに行かず困つて、家内にお前がやれば一番よいのだが、お前やらんかと云ひました處が、家内がそれではやりますと云ふ事になりました、合意上の共稼で今日皆さん御承知の通りで御座います。

土屋 副社長

それは大變結構な事で御座います。それでは奥さんの方からどうぞ。

矢澤藤太郎氏

それから一つ、二十五年に多勢さんと始めまして、二十七年に共同したのでありますが、最初にアメリカに

参りましたのは會社の事でして、當時メキシコに移民事業と云ふ、郵船會社關係の吉川とか云ふ人が株式會社（吉佐移民會社）を拵へて、そしてメキシコへ移民を企てると云ふ事がありました。メキシコへ移民の事業につき、その頃は若い時分で之は面白いからと云ふ考を持つて居ました。又アメリカには先代の取引をした所が御座いますので、その調査旁々家内をアメリカにやりました。何故私が行かずに家内をやりましたかと云ひますと、アメリカは女尊國である、男が行くより女の方が却つて國際上有利だらうと思ひましたので、どうだお前アメリカへ行かんかと云ふと、それぢや行きますと云ふので行きました。その時に上野季三郎さんと云ふ人が力になつてくれまして、何しに行くかと云ふので、實は移民の事と薄荷の事で來ましたと云ふと、移民なんて事は日本政府から委任を受けて來て居る人に委かせて置け、とても移民の仕事はあなた方に向かない、薄荷の方をしたらよいだらうと云はれました。家内があらにまゐりましたのはそんなわけであります。當時の乗船は横濱四番米國會社の桑港行リオデヂャネーロ號でありました。

土屋 副社長

ちや奥さん、どうぞ。

上山英太郎氏

奥さんは若いですが、私の家内は八十五歳ですが、今なほ工場へ行つて朝から出張して居ります。長男は態が悪いから家へ入つてくれと云ふのですが、なか／＼きゝませんよ。

矢澤わか夫人

只今主人から話したように私が仕事をやりましたのは、製造の機密を他人委せにして居つたら大變だと思ひまして、自分でやらうと思ふて、母に相談したら、母も大變働く人でありましたが、これからは女が働かなければいけない。何時迄も男ばかり働いて居つては駄目だと云つて、大變すゝめてくれました。私はそれぢや、やらなくてはならないと思ひまして、ぼつぼつと自分で始めたので御座います。

あちらへ行きましたのは、主人が薄荷をやりたいがどんなものだらう。行つて調べて来てくれと云ふので、それぢや私が調べてまゐりますと彼方へ行つたわけです。一人でしたが向ふへ行くのに、東久世通禧伯からワシントン公使建野剛三子への紹介書を持つて行けば、兎も角お友達があるのだからと思ひまして行きました。サンフランシスコ迄行きまして、領事の珍田さんのお宅へ伺ひますと、どんな事だ、そんなワシントン等迄一人で行くなんてけしからん事だと云はれました。私はその時二十三でした。それからだん／＼話してゐる間に不思議な話がありました。珍田さんと云ふ方がおいでになりましたが、珍田さんは元外務省で電信係をしてゐた。その時分は中條さん、皆さん御承知のあの中條さんと非常に心安い仲でして、中條さんが珍田さんの所へ電信を持

つて来ては、外國へ電信をかけて聞いてくれ、薄荷と云ふものが何とか商賣にならないかと云ふ事を聞いてくれど中條が頼みましたさうです。その時の事を珍田さんが思出して、それは不思議だ。私は東京にゐる時かう云ふ事がある。面白い事だと云つて私の爲に、方々から聞いたりして調べてくれました。薄荷をやるには先づブランドをつくらなければいけないとか、何んとか調べて下さいました。そして移民は貴方方の柄でないから、決してしない様にと云はれました。それから毎日領事館で客として扱つてくれ、アラミダと云ふ別荘地のような所に住んでゐました。その時にコロンプスの博覽會がサンフランシスコで開かれまして、日本からとても澤山のお客でした。そして皆領事館へお客に來ました。其時サンフランシスコには日本の女とされて位置を保つ婦人と云ふ者は私に珍田さんの奥さん、鍋倉と云ふ正金銀行の支店長の方の奥さん、この三人より他にありません。大變皆さん珍らしがりまして、毎日會なんか開いて引張り出すのです。私はとても弱つてこんなことをしてはいけないと云ふので、ミルス、カレージ女學校へ入りました。そしてなるべく呼びに來ても出て行かないと云ふ事になつたのですが、矢張なんかと云つては、馬車を持つて迎へにまゐりました。日本から多勢のお客さんが來られ、珍らしい故もありましようがそれは大切にされました。〇〇〇費用でどの位贅澤をしたかわかりません。家から其の費用としてのお金を送つて頂きませんでした。それは大切にされました、私は何んと云ふ仕合だらうと思ひました。他に女が居ませんですからね。さうして居る間に薄荷の事もわかりましたので、私は歸ると申しましたが、一人で歸つては危ない、もう少し待てと云つてゐる時に、丁度正金の支店長の高木貞作と云ふ方が、日本に歸る

事になりましたので、その人と一緒なら安心だと云ふので一緒に歸りましたが、私は洋行と云ひましてもサンフランシスコから、一足も出ません。

間違が起つたら大變だと云ふので、どうしても出してくれませんでした。歸る時は船中で正金の方が、薄荷營業につき話が出て輸出品なら、資本は貸してやるからと御話が有りました位で、歸國致したら當座貸越の契約取引を開いてありました。所が主人は手形割引の分で、別に融通をして居りまして、貸越を一文も使ひませんでした。私は歸つて來てから製造を一生懸命にやりました。薄荷を干すのに風が要ると云ふので、唐箕で風を作つて薄荷を干した事もあります。その頃はまだモーターファンが、日本へ來てゐませんでした。一つお土産に持つて歸りましたが、直流と交流の違いで、私共には使へませんでした。知人でしたが、電燈會社支配人上野吉次郎さんがそれを聞きまして、是非譲つてくれと云ふので差上げました。記念物として横濱の電燈會社に参考品としてあります。それが日本での始めてのものでした。

まあ始めは薄荷屋になる迄には、色々困難も致しまして、その頃は兎に角主人共々に年が若くて、苦勞が足りませんので、先賣なんど勝手にして居りました。先代長岡さんの御主人はなかなか御苦勞したお方です。上手に經濟をおやりになりました。私の主人は段が違ひます。

面白くて先賣すると云ふ工合です。それは面白い事もありまして……。

矢澤藤太郎氏

五四

製造すると云ふ事につきましては、種々研究致しました。倉の窓で大根を干して居つた。それが辛くなるので、薄荷を乾燥すると自然窓から薄荷が出る。之は薄荷が水分のある處へ行くんだと云ふ事を考へついで、八間位の煉瓦藏でしたが、いろ／＼と考へて構造を改めて製造致しました。モーターファンも折角持ち歸りましたが電流の違いでこちらでは使ふ事が出来ませんでした。随分、種々と苦心が御座います。

矢澤わか夫人

大體が失敗が多う御座いました。さうしてその中に、だん／＼面白味が出来てまゐりまして、今度は一生懸命になりました。

矢澤藤太郎氏

先刻家内の申しました先賣の一件ですが、横濱で相變らず先賣をして居りました。明治三十五年初期に於いて自分は平素愛顧を受けてゐた、三・四の獨逸商人に對し腦油多量の先見込賣りをなしました。當時腦七圓前後、油三圓五十錢前後でした。その秋になつて東北奥羽地方に颱風が起りました。米澤街道は一抱へ以上の松並樹が

一夜にして全部倒壊しました。その時に山形縣の薄荷が殆んど莖がぶつ飛んでしまひまして、元も子も薄荷の葉莖がなくなりまして、原料不足で引渡し不可能の爲、取引先から荷渡しを請求されて弱りました。當時は薄荷の葉莖を吹き散し、被害甚大殆んど無收穫となると一躍腦拾圓より拾四圓、油四圓より六圓五十錢と暴騰せるばかりでなく、契約不履行の不得止の結果となりました。そこで外人商關係者に妥協懇談の上、壹名委任代商「ウインクレル商會」に交渉契約し、其の義務遂行の目的を以つて明治三十六年五月神戸市に移轉しました。

一面其以前より三備方面よりの薄荷栽培が盛になり、随つて取卸油産多量となり、地の利に於いても内心移轉希望の折柄だったので、早速銀行其の他の債務關係は、土地建物を銀行に引渡し、一切の整理をなし、機械器具の主なるものを移し、横濱市壽町四丁目の工場を明渡しました。

其の後多勢商店が銀行より貸借借して使用して居たと聞いて居りましたが、明治四十三年横濱南部一體の大火災の時全焼の災厄にて消滅してしまひました。

自分は神戸に移轉の後ウインクレル商會經營の下に海外に對する矢澤ブランドとして、再製研究、販賣努力及原油買入方はウインクレルに一任し、爾來數年の後「北海道サミエル事件の翌年」獨立經營をなし、折柄囑目あつた三井物産に勧誘取扱ひ開始せしめました。この時は既に外人商に對する約束債務一切履行済となりました。尙湯淺商店にも謀り、兩店の後援の下に擴く内外の取引をなしました。當時輸出入店としては、辰鈴木商店に劣らざる覇者でありました。

五五

大變でしたその時は……。一晚のうちに薄荷がなくなつて借金が出来ました。それで借金を濟さなければなりません、一生懸命に働きました。丁度今度の御規則と同じように家内一同自肅して柔いものを着ずに、木綿のものを着て倉の中へ入つて働きました。神戸へ移らうと云ふ事になりました。私達は二十人からの職工をすっかり連れて来たのであります。その時丁度大阪に第五回内國博覽會がありました、それを見物致させましたら、その儘一晚のうちに十五人計り横濱へ逃げてしまひました。こんな處にゐてもつまらぬと云ふて、逃げたこの事でした。それから種々と苦勞しまして働き女の氣違ひが出来まして、製造につき責任を以つて働きましたから、他人からは主人をお尻にしている様に、彼れ是れ噂されました様な譯です。それでも私は製造に熱心で、特別やかましく云つてやつて居ります。どうしても澤山扱ふ店でしたが、幾度も失敗してまゐりました。ですが、製品は他所より勝つ、立派なものを作ると云ふ事はやつて來ました。私はそれだけ自分で自信があります。今でも他所より見劣りが無い、綺麗にして出すと云ふ風に心がけて居ります。ですからだん／＼家が樂になつてきました。

大正七・八年に於いて、神戸に於ける再製薄荷の大買占問題と云ふのが起りました。其の買方とは久原商事、

茂木合名會社、湯淺商店其他四五の重なる輸出業者は匿名にて買占方針を取り、賣方として鈴木初め横濱の小林長岡、多勢等の專業者は自分の外は全部賣方に廻り、當初買方には業者としては居なく、輸出取扱者のみにて、自分は何づれにも偏せなかつたが、買方とし業者の相談乃至顧問役として物色して居つて、自分に交渉があつたので、殊に舊主家茂木合名の同盟しある事の點につき、潜越行爲なりしが、賛同加盟契約をなしました。大正八年二月でした。その後方針を打合、自分の意見として、第一に必要なのは資金、第二には賣方に對し戦線期月を延長しない事とし、壹月なれば三月切と限定し、新期日の取組を嚴禁し既約期月物の受渡を履行、現物の追求方針を取り三月物引渡しには賣方をして大苦痛を感ぜしめました。近頃壹參物賣買と云ふのがありますが、之が嘴矢となつた商習慣です。大阪東京等を始め各賣藥店の内瓶詰め品迄を蒐集したと聞いて居ります。この時の受渡數量は實に六千函組の多きに達しました。買方としても每期取引に對する資金も中々容易ならず、其金融には相當の困難憂慮致し、又其の多數の現品を本邦に介在させる事は、値段の維持の點に付ても面白くなく、何づれ海外の顧客に賣却する事であるから、丁度自分と大村商店と輸出部經營の事であるから、大村さんにロンドンの客筋に對して、双方間シンジケートを組織するの交渉をし、ナショナルプロビシヤル、バンクを通して、四十六萬磅のコンファームド、クレジットを香港上海銀行神戸支店に取組、信用狀を發行せしめ、漸次英國に向け輸送準備をなしました。處が此の五百萬圓近き信用狀の引受銀行につき少なからざる支障がありました、(それと云ふのは當時の政黨關係で、賣方主腦側の久原により、茂木は反對黨關係で此の爲替を買入れ方に大なる干渉壓迫

を受けたわけです。萬難を排して、日本銀行等迄の諒解の下に横濱正金銀行神戸支店の爲替買入を得たる上、第一回として數百函組の輸出をなすべく、一切の手續きを終り、既に神戸港出帆の前日大正九年五月二十二日、茂木合名の關係深き横濱七十四銀行の休業發表の結果、正金銀行より信用狀買入れ中止となり、爲に積込たる薄荷數百函を積卸の不得止悲境となり、一方財界の動亂となり、薄荷市況は組四十圓臺のもの一躍二十圓臺と慘落し、實に當時買方連の心理名狀し難き状態でありました。爾後其整理客易ならざる事で自分、大村商店は海外及び本邦に於ける損害一時〇〇〇圓に及びましたが、漸次整理して、自分としては關係二・三の銀行及び久原商事等に〇〇〇圓の負債となり、其の内一・二の債權銀行より後援を受くる内約であつたが、不幸にして其關係二大銀行が整理銀行となりました。自己擁護の爲新規營業及貸出不能の状態となりました。そこで新に二・三後援方交渉致しましたが、何づれも前債權銀行の自分に對する行動を杞憂して、何れも不調に終りました。その後資金不充分なる爲薄荷取扱ひの輸出商に謀り、匿名共同經營をなし、以外の資金については再製品賣約に對し、アドゥパンスを受入れ、營業中原料取卸油の騰貴となり、意外の損失を見工場建物を擔保として引渡し、期限となり競賣に附せられ、一方商賣上より損失にして、自分負擔額の債務に對し、建設場明渡し、共に執行を受け、不得止工場設備一切の取毀となり、老舗も共に水泡に歸するの悲境に陥りました。その後努力中幸に矢澤ブランドの價格ある老舗を認識せる同情有力者の援助に依り、矢澤薄荷株式會社を設立、更生の一步を進めたわけです。

昭和八年は北聯が薄荷事業に参加した年ですが、北聯が薄荷の大口荷物の進退につき、大騒動が起つたのであります。その始末やら製造關係につき、北さん(當時の北聯販賣部長北政清氏)が來神して種々懇談協議の上、主人と私と共に北さんと特別の契約をして、札幌へまゐつたのであります。北聯の薄荷事業に着手の折柄、組合の委託薄荷の處置進退及び、是に伴ふ必要なる再製場建設設計より、其の再製技術者の物色等種々困つて居た北聯としては、是非製造を教へてくれ、もうあんに教へて貰ふより方法はないとのお話に困つて、私は他の事ならいけません、之は北海道の産業の爲、日本の爲ですから、自分で費用を持出してやつたので御座います。

一方再製業者として北聯の實現する事は、脅威的大影響を受くること火をみるより明かな事故、業者としても種々關心を持つてその成行を監視してゐたので、自分としても覺悟の上、北海道へ身を捨て、北聯の爲に一生懸命にやりました。

北さんが會長との衝突で、兩者共北聯を辭職されましたが、兩者との契約に對し私は何處へも、尻を持つて行くことが出来ません。皆が覺えたら歸ると云つて主人と約束したので御座いますから。……

上山さんが薄荷事業を開始したのは大正七年頃と思ひます。製造人は木村文太郎さんでして、同人は明治二十八・九年迄小林、多勢共同經營の當時従事してゐた者で、多勢さんが分離した時に、小林に止り永年勤続して居りましたが、大正元年サミエル商會製造開始の時、或人の煽動行爲に乗ぜられ、永年關係の小林を強辭して、サミエルに入り、二・三年の後サミエルが休止となり解雇せられ、徒食してゐた折柄であつたので上山工場に入つ

たものですが、しばらくして工場的事で意見の相違があつたとかで、同店を辭し、後浪々中昔時代の知己とて自分の處に頼つて來ました。そこで同人の意思も聞き小林（祖父の時代）へ復歸方相互の爲勸誘再勤を交渉しましたが小林としては辭店當時の心境上、且つ店內關係等もあり、不調となりました。その結果九年春から十一年秋迄、自分の所に在店してゐましたが、郷里に歸りました。

長岡商店は大正六・七年の頃より横濱で試験的に小計畫でやつて居りましたが、八・九年買占問題當時、賣方として利益を得た結果、本格的に再製業開始、大正十二年關東大震災にて、神戸に十四年に再製場を設置したと覺えて居ります。

小林商店も震災以前は横濱でありましたが、大震災後神戸に再製場を移し、出張店舗も一緒に開きました。

多勢商店も大震災厄後小林、長岡同様工場の設置の計畫がありましたが、敷地其の他の都合にて依然横濱に止り再設致しました。

宮部、末高再製業は大正十三年開始と思ひます。

鈴木商店薄荷業開始以來、同店の隆盛に應じ、在外歐米の支店より自己製品の買注文を出し、主客呼應して投機商略を取り、Kを伴ひSKとして宣傳先物賣買の今日の起源を作つて居ります。

Yブランドはウインクレルの賣方を初め、三井、湯淺等何づれも實需品顧客への取引を主となし、確實の方針を以つて進み、獨米のシニメル製藥會社を始め、其他需用家各位の愛顧偉大なるものがありません。

大阪上山商店薄荷業開始以來、殆んど二十九年近きに及んでゐる今日迄、上山さんの敏活手腕によつて、不絶延長先賣商略終始一貫能く本業に對し、活動して犠牲の少ないのに今尙ブランド關係では餘り思はしくありません。

自分の處のYブランドもよい人があれば引受けて貰はうと思つて居りましたが、その内にあの人ならと云つて目星をつけたのが、日本香料の小野さんです。仕事の方をお願いして、商標と共に矢澤の名儀を入れたものを残して頂き、結構な事はないと思ひ、種々お願ひ致しました。只今も名前を残して居ります。そして一生懸命に働いて居ります。

矢澤藤太郎氏

ブランドの事で御座いますが、太陽と申しますが、あれは今迄になりますのになかく苦心が御座います

最初は波に日の出に鶴のやうなものを出しました。之がレジスターになりました。東京本所の松本と云ふ罎屋さんの商標が、之と同じだから不可んど云ふのです。私は松本さんの所へ行きまして種々交渉しましたが、到々駄目でした。それから種々苦心して、終には特許士に相談しまして、鶴とか波だとか云ふものを取つて、商標として出願しました。日の出についてはなかく、辛苦困難な事がありました。完全な商標になりました。

土屋 副社長

どうも有難う御座いました。今種々矢澤さん御兩人から薄荷のお話を伺ひましたが、今度は一つ長岡さんからお話し願ひたいと存じます。

長岡 佐介氏

先程は上山さん、安住さんなりが菊の事について御話しになりました事を伺ひましたが、洵に有難く感じました。又薄荷に就いて矢澤さんから二十五年、當時の事を御話になつたのでありますが、有難く伺はせて頂きました。私は皆さんの様に努力も何もありません。只先代の意志を繼いでそれを忠實に守つて居た丈であります。又先程矢澤さんの御話がありました。先代は非常に苦勞した人でして、大分種々の事をやつた人であります。

それで薄荷の生産とか、昔の事につきまして、先代から聞きました事を申し上げたいと思ひます。其の前に一寸先代の事を申し上げぬとわかりませんが、先代は薬屋の仲間でした。店は大阪の伏見町一丁目でした。先代は三代目、私は四代目で御座いますが、私は横濱へ行つたのは、明治二十一年であります。一寸餘談になりましたが先代は非常に貿易と云ふ事は熱心でありまして、店も始めは和漢薬草根木皮等を扱つて居たのでありますが、洋薬をやらなければいけないと云つて、當時同じ考へを持つて居たものが四人、長岡、武田、鹽野義、田邊さんの四人で組合を造り、四人が取締役に成つて外國の品を取引したさうです。

貿易は薬ばかりでなく、砂糖、洋酒なんかも扱つたさうです。當時貿易は歐洲、アメリカでなく、香港から取引しましたさうで、之が一番多く香港との取引が貿易と云ふ事に成つて居つたらしいです。先代は明治十年に既に香港へ渡りました。實は九州の方へ掛を取りに行き、その足で朝鮮へ渡り、上海へ行き香港迄行つて、香港で店を出しました。明治九年に香港に開店したのが、日本人として一番最初が三井さんです。其の次に誰かゞやつて先代は三番目であつたと云ふ事であります。兎に角貿易と云ふもので、非常に頭が進んで居つたので御座います。處が其の時期が早過ぎまして、明治十七年迄店を出して居りましたが、到々失敗して歸つて來たのであります。明治十九年に大阪の店をやめて、東京に行きました。そして二十一年に横濱に店を造つて、震災迄横濱に居つたわけです。

先代は随分と苦心されました。それに比ぶれば、私なんか誠にほんやりしたもので、私は今こそ佐介を名乗つて居りますが、幼名は鹿藏と云ふ名前でした。私は明治二十一年に丁稚をして居りまして、三十一年になつて長岡姓を名乗つたのであります。私は京都府下の奈良と、京都との間に長池と云ふ驛があり、其の附近の富野と云ふ處で生れました。此處は昔薄荷の生産地でありました。

それで昔の事について話が出ると思ひますから申し上げたのでありますが、私が大阪の長岡へ参りました關係も、結局薄荷なり其の他の藥草に關係がありましたので、大阪の藥種店長岡へ行つた譯であります。それですから小さい時分から薄荷の事に就いては見もし、聞いても居りました。

その頃學校は遠足も、修學旅行も何んにもありませんから、私は横濱へ行く時に始めて汽車汽船に乘りました。海を見るのも始めてでありました。

始めて種々のものを見て、感心し乍ら横濱へ行つたのであります。

鐵道は東海道線は通じて居なかつた。此方は大津迄でした。入店してから私に話された先代の考へは、同じ商賣をするにしても、御國の爲に成る商賣が一番良い、それで外國から金を取るのが一番國の爲になるのぢやないかと云ふ事でありました。

國の爲に盡くして、尙自分で金儲けしたら良いぢやないかと云つて貿易をされたのであります。併し貿易も其

の時機が早過ぎましたのか、最初に直接取引をやつて失敗致しましたので、其の後直接の貿易は絶對されなかつたのであります。

自分も直接やりたいと云ひましたが、絶對に許して呉れませんでした。

日本人が直接海外貿易をやる様になつたのは、歐洲戰爭後が一番盛んでしたが、それ迄私の方の取扱商品は獨逸人の手によつて大部分行はれて居りました。其の爲獨逸人より他に誰も扱はなかつた關係もあり、旁々私はやはり直接貿易の事を考へました。

明治三十一、二年の事でありましたか、直接貿易をやらうと云ふので、歐洲の方へ文通した事があります。其の時話が進みまして向ふからも、信用狀を呉れると云ふ事に成りましたが、其の時先代がお前は直接貿易をやるのか、一體御前は其の文に何んと書いてあるのかわかつて居るか、わからぬのに判を捺さなければならぬそんな事で貿易が出来るか、代理店と取引すれば良い數軒取引して居れば、相場もわかるし、間違は起らない貿易も良いが、直接やるのはいかんと云はれました。

私は只その通り守つて來ただけの事でありました。

それで直接の貿易と云ふものをやらなかつた爲、實際品物を多く扱つたのですが、表面の貿易実績は少ないのであります。

一番多く扱つて居ながら少ないと云ふ例がありますが、實際上に於いて薄荷の海外貿易につきましては、少なからざる努力と犠牲を拂つて來た次第であります。

尙澤山の薄荷を輸出させるに付いては生産を多くしなければなりませんので、栽培奨励方面に特に力を入れて参りました。

それから先程山形の薄荷の事が出ましたが、私は明治二十一年この方、この事は先代から聞いて居りますが、明治十五、六年頃迄は誠に薄荷が出廻ると云ふ事は少なかつたのであります。

誠に僅かなものでしたが、それを支那人に一寸賣つただけ位でした。此の事について惜しい事に、震災で其の記録参考書を焼いてしまひました。

兎に角日本の薄荷は少なかつたそれが明治十六年に山形で十萬斤出來ました。之は確に私は聞いて居ります。其の時に油が只の一斤六拾錢、腦が九拾錢組で一圓五十錢と云ふ事でありました。其の時分に現今の様な製精法は知りませんが、粗製腦、油の分離法は日本で行はれて居たのであります。

それを田舎の産地腦と云ふ事を申して居りますが、田舎で腦、油は出來ましたが、その腦は五パーセントも十パーセントも油が残つて居りました。其の産地腦を持つて香港へ行く頃は、腦がとけて今の取卸油より濃い取卸油になつてしまつたと云ふ事がありました。其の當時横濱が五十番地に、コツキングと云ふ藥店がありました。

獨逸系の英國人でしたが、そこで私等が産地腦、油を買入れて、今日で云ひます製精法を行つて居りました。其の時の實際の方法は良くわかりませんが、兎に角腦を今日の様に乾燥して居つた事を記憶して居ります。

其の當時我々は腦を乾燥致しまして、油分を發散させる事が惜しくて我々がやらなかつたのであります。

又油をしぼり取ると云ふ事を知らなかつたのです。それは明治二十一年にコツキング藥店でやつて居りましたそれから私の方でもやりました。

處がそれより前に私の店は大體地方に取引が多い爲、日本の端から端迄取引店がありました。それで地方に馴染が多い、その爲産地のもを買い集めると云ふ手蔓は充分にありました。

産地から集めましたものゝ賣込は横濱、長崎で取引しました。

横濱では其他藥種類の取引が鳥居徳兵衛と云ふ人と多くありましたので、先代が横濱へ出張した時代は、毎日そこへ泊り込んで所謂昔の取引をやつたのであります。それから其の鳥居さんの番頭さんでありました小林さんとは、其の時分から極く懇意で御座いました。其の後小林さんが鳥居さんから獨立されましたから、私の方も田舎から品物を集めて御取引を致しました。

その頃既に東京の神田に、沼安さんと云ふ店がありました。其の人が東京では製造の始りです。

それで日本薄荷の經歷に就いては、私ははつきりした事は申上げられませんが、大體日本へは支那から渡

つたものだと云ふ事を聞いて居ります處が、御承知の通り日本に野生の薄荷と云ふものがあります。あれは腦分が御座いませぬ。併し昔から薄荷があつた事は確かだと思ひますが、一説には遠山和尚とか何とか申します方が支那へ佛教を調べに行きまして、歸る時に御茶と薄荷を持つて歸つたと云ふ話もあります。それは一千七百年前と云ふ話であります。それで御茶は京都の宇治、薄荷は長池と云ふ風に植ゑたと云ふ事に成つて居ります。其の後明治始め頃の話を、山形の多勢長兵衛さんと云ふ人が、宇治廻りをした時に、丁度長池で中食されたこの時薄荷を見て、山形へ持つて行かれたとの事であります。其の後山形が産地になつたと云ふわけであります。

私が田舎に居つた小さい時、薄荷を取つた事を知つて居ります其の時分には、今の蒸溜器とは違ひますが、蘭引と申して居りました。おひつの所へ湯湧しを付けた様なものに、乾燥葉を二、三貫目入れて、それから薄荷を造つたのであります。

さう云ふ風にして薄荷を取りました。それで山城の薄荷と云へば、一番良かったのです。其の時分産地腦を造るのに、夜分外の寒氣で結晶させて、溶けない内に油を抜いて、京都へ夜通しかゝつて持つて行つたさうであります。晝は油が溶けるから、夜持つて行つたと云ふ事を先代から聞きました。

又其の頃は薬のまゝで、薬屋が買つて居たものであります。それで長岡としては薬屋の關係から、初代（文化十一年）より薬として薄荷を取扱つて居た譯で、此の點一番古い事と存じます。

薄荷の種類は青軸、赤軸とがあります。赤軸はむらさき莖とも、赤莖とも云ひますが、之が一番腦分が多いので山城の薄荷も皆之でありました。青莖は腦分が一番少いのであります。私は明治二十三年、二十四年にかけて山形へ行きました事があります。先代と一緒に行きまして其の時行つて見ますと、皆むらさき莖に植替る爲悪いものを取つて植ゑ替へて居りました。山形は北海道と同じで、始めて植ゑる時に良い種を植ゑる。そして明年になつたら一緒にしてしまひます。

今の北海道のやり方がさうです。中國からこの邊へ参りますと、山城でも一年一年掘り返して種を取つて、又春植えて秋收穫するかう云ふ事になつ居りますが、山形は氣候の關係でそれが出来ない北海道と同じです。只附近の土をひつくり返すだけです。北海道は一年に一回しか取れません。山形は二回中國からこの近在は三度取れます。その後だん／＼養蠶が盛になつて來まして、薄荷と云ふものが顧みられなくなつて來た。そこへ持つて來て植ゑてから大分年月が立ちまして、苗が段々うまいものを喰べてしまふのか知れませんが、或は地やけすると云ひますか段々出來が悪くなる。そこへ養蠶が良くなつて來たので、薄荷は悪くなつて來ました。北海道の方へ澤山行く様になつたのは日清戦争後でした。

北海道の薄荷は屯田兵が出來た時に、旭川の近くの永山に植ゑたのが始めてです。それから北へ行つたのは、遠輕の學田、あの部落へ植ゑたのです。そんな事を聞いて居ります。

それから中國へ移つたのは明治二十四、五年から七、八年でした。それから福山の在に服部村と云ふ所があります。その時には製造するのは皆業者か村の人ばかりで、之が服部村で秘密に製造すると云ふ有様でした。佐藤龍三郎と云ふ人がありまして、納屋の中で締切つて製造しました。蒸溜して居る處は決して人に見せない。商人が方法を盗んで行くのを心配してゐず。山形の方もさうやつたらしいです。取卸油を買ひに行きましたのは皆仲買ひを使つて買はせました。明治二十四年の收穫は六萬斤でした。その年に私と先代が山形へ取引をすゝめに行きました。其の時は香港、上海銀行のフイトンと云ふ人が居りまして、其の人が思惑に買ひました。其の時に山形へ行つて、組一駄二百五拾圓から參百參拾圓迄買つたのです。其の時代全部買つても代金は拾萬圓も要らなかつた位でありました。

其の時先代は産地の八分通り迄、買つたのです。其の内他所からだん／＼電報が這入つて來たので、買へなくなつたので歸らうと云ふ時、車がひつくり返つて主人は手を折つてしまつたので病院へ入りました。私も長い間病院へ居りました。雪どけでひどくなつて居る所を廻つた所が、凍つて居た爲車がひつくり返つてしまつたのであります。それから中國へ移りまして、二十七、八年頃は未だ一萬斤なかつたと思ひます。それから後になりまして、ずつと増産し一番多いのが大正十五年頃が、五十萬斤位だつたと思ひます。中國の方はそれだけ私知つて居ります。他の地方は悪かつたです。北海道は私の調査では八百斤から一千斤しか出來なかつた。三十四年に一萬斤、三十五年に一萬九千斤、三十六年に六萬九千斤、三十七年に六萬六千斤、三十八年に十二萬斤、それから

多いのは明治四十四年十八萬斤、大正五年の百拾貳萬六千斤何んほど云ふ時があります。その時の安値は五圓高値は六圓五拾錢一組です。七年の景氣の良い時は、一千六百圓から五百七拾圓、八年に三千七百圓から九百五拾圓大分差があります。面白いものです。それから三十八年には矢澤さんが云はれる通り鈴木さんが始められるし我々はうんどいちめられた様です。然し頭のない人間ですが。只意地つばかつたですね。只意地でもつてお互に商賣をやりました。次に耕作の方法は其の土地の氣候と關係で、北海道の様にしなければいかんのかも知れませんが、中國の様な方法にすれば確かに改良出來ると思ひます。

肥料は先程も御話がありました。矢張りこれには油粕、にしん粕がよろしい思ひます。六ヶ敷しい肥料を使ふ様な事は要りません。もつとも今は肥料の不足で充分な事は云へませんが、又製造に就いては先に矢澤さんが云はれた様に明治二十五年よりおやりになつたが、それはコッキンダの製造方法を眞似て製造せられたのかと思ひます。そこへ行つて見て參りましたのが始めです。

安住伊三郎氏

貴下の郷里に今でも薄荷がありますか。

長岡佐介氏

今でも少しあります。薬のまゝで大阪へ出て居ります。僅かのもので。山城の薄荷は腦分五十五パーセントも出ます。それから荷造方法は昔から見て種々改良致してあります。

楠瀬正一氏

横濱へ工場を御持ちになつたのは何時頃ですか。

長岡佐介氏

明治二十九年に尾上町、それから高島町に持つて行つたのは三十年です。昔は蒸汽をたきませんでした。風呂であつたんですが、其の風呂へ後で這入つたものです。

尙先程菊の御話がありました。私の方も菊を専業として扱つて居ります關係上、菊の事に就いて申し上げます。

明治十二、三年頃インセクトパウダーの名稱で、此の粉末を獨逸人の手を経て輸入し、のみ取粉と稱して販賣致しました。

當時既に、之は植物性の粉末である事を認め、此の種子を探し需めたのでありますが、仲々容易に得られず、

明治十九年僅かに其の種子を得て、先代佐介は神奈川縣牛久保村に試作致しましたのですが、風土の關係が思ふ様にならず、數年に亘る苦心の栽培も異ならなかつたと云ふ事があります。

其の後和歌山地方より種子が三備地方に移り、其の發育良好で栽培の増加するに就いて、率先して廣島縣下の島々へ栽培奨励をせられ、生産増加に努力されたのであります。

次いで除蟲菊の北海道に適するを知るや、薄荷の買入の爲め北海道に出張しつゝあつたが、明治四十四年旭川市に出張所を開きましたのを幸ひ、除蟲菊の栽培を奨励し各地に種子を配布、其の有利なる事を力説し、隨つて生産品は率先買入れて、其の確實有利なる事を生産者に周知せしめ、種々栽培奨励に勉められたのであります。

尙此の様な苦心談もあります。現今でありましたなら活動寫眞の機械でも持つて行くと云ふ事が出来ましようが、當時は幻燈なるものを持つて雪中嚴寒に雪靴をはいて各地を廻り、農家を集め除蟲菊栽培の國益なる事を力説し、率先奨励に力を入られたのであります。

其の間或一部からは種々なる非難を受けましたが、強い信念を以て道内各地に栽培奨励し、聽て和寒地方に栽培の實績が大いに揚り、道内百萬貫以上の生産を見る今日の隆盛となりました。

其の裏面には皆さんの知られない苦心をしたものです。

尙生産の増加に伴ひ輸出貿易に於いては、原料のまゝにて殆んど輸出して居りましたが、之は皆相手國にて加

工されて居つたので、随つて製造加工の利は輸入國に占められて居たのを憂ひ、之がエキス化を看破し、昭和三年頃より種々研究して、エキス製造に着手したのであります。

此のエキス製造に就いては日本に於いて私の方が一番初めではないかと存じます。

尙今日一般に行はれて居ります、米國の生物學的殺蟲試験も最も先に取入れまして設備を作り、除蟲菊成分のピレトリンの殺蟲試験も研究致しました。

土屋副社長

大分時間がたちましたから楠瀬さんにつ。

楠瀬正一氏

顧みますれば私は明治三十九年から滿三十五年間、薄荷を扱つて居りまして、其間買入、販賣、製造に一日として、休んだ事ありません。

只今皆さんの御話を承りまして、今昔の感に堪へないものがあります。さて三十五年前と申しますと、ここに御出にならるゝ御若い御方々は、未だ御生れになつて居られない以前の事ですから可成り古い話であります。其當時即ち明治四十年前後の薄荷取卸油の生産數量は、約三十萬斤程でありまして、是れで以つて内地及外國の總

需要を充すに充分な状態であつたのであります。又其時分から已に相場の高低は非常に激しかったのであります。當時は三備地方が主産地でありまして、北海道は極少量でありました。即ち三備地方は約八割、北海道は約二割の比率であつた様に記憶して居ります。其後海外への輸出は増加の一途を辿るのみでありまして、又同時に内地の需要量も増して参りまして、大正の初年には一躍七十萬斤程の生産を見るに至つたのであります。先程長岡さんから申されました通り、大正五年は非常なる豊年作でありまして、本邦生産總額は約百三十萬斤に上りました。其後五年十年と経過致します毎に、若干の増減はありましたが、遂に年産平均百萬斤を下らず、又多い年には百五、六萬斤に達する事もありました。

最近昭和七年より昭和十四年に至る八年間海外への輸出數量は、毎年約百萬斤を下らず、昭和十二年の如きは實に百二十五萬斤餘りの輸出を見る盛況を呈するに至り、薄荷の生産並に輸出共大變順調に發展して参りましたのであります。又昔より産地生産者との關係は、皆金を前貸して其の生産を助け、時に又産地から相場が氣に入らぬと言つて來る事があれば、内金を貸など致しまして、陰に陽に其の利便を計つてやつたのであります。又其の取引は凡べて現金取引でありまして、銀行や郵便局の利用出來ぬ時は、現送すると云ふ風でありました。就中三備地方は福山が中心でありまして、銀行送金が利きませんから、外廻りをするものに神戸から五萬、十萬と云ふ金を現金で持たせてやりなど致しました。又北海道への送金は價格表記一袋壹千圓しか送れませんので、毎日面倒でも數十袋にして、何萬圓と云ふ金を送つた事もありました。又其の後小樽支店から北見へは信玄袋へ二

十萬、三十萬圓と現金を入れて、持つて行つた事もありました。特に旭川、野付牛、湧別、遠輕、紋別、網走などに出張員が居りまして、其の取引には交通も不便の處故、棧に乗り又馬に乗り、現金を持つて買付けに出掛けました。毎年年末には北見國湧別濱から最終の船が出る。之れに後れては翌年廻しとなる爲、此れに積込の間に合ふ様に奥地買付運搬等、随分苦心を致しましたものです。斯く同業者の皆さんと共に、辛苦致しまして薄荷を育てて参りました譯であります。そして現在の如く日本の特産品をして今日の盛況に至らしめました事は洵に有意義な事と存じます。又相場の安い時は業者も産地生産者も眞に同心一體となりまして、互に分け合つて手持を致し又高くなつた時には其の苦しみを取返すと云ふ風にして、只管海外輸出に精勵致しました譯であります。

私の勤めて居ます鈴木商店の金子直吉翁は私の大先輩であり、又主人の如く仕へて居りますが、以前には大變遊獵が好きでありまして、確か明治三十五年の頃の事と承つて居りますが、鈴木店の主人の御供をして、備後の鞆へ鐵砲打に行きました。其の時附近の畑一面に薄荷が植付けられて居ましたので、此れは何にするものかと土地の人に聞きますと、此れは神戸の外國商館の方へ賣つて居りますが、貴方の方でも貿易をやられて居られるなら外國へ引合をして頂けませんでせうかと云ふ事であつたさうであります。嘗つて金子翁は明治二十二、三年頃から我國の特産品たる樟腦製造輸出をやつて居りましたが、明治三十三年には臺灣の樟腦を、又三十五年には内地の樟腦をそれ／＼專賣にする様に建議して、遂に之を實現致しました。

そこで同じ我國の特産品たる薄荷にも大變興味を持ちまして、遂に此れにも染手せられたのであります。當時鈴木商店には金子翁と同郷の土佐の人で、服部馬太郎と云ふ大變器用な人が居りまして、樟腦製造に關係して居りましたが、此の人に薄荷取卸油から結晶を取る事の研究をやらす事になりました。又元の衛生局技師の一松と云ふ人や、元横濱衛生試験所長杉山仲藏と云ふ人などを聘して一層深く學理的に研究する事になりました。そして私共も種々協力致したのであります。どうも結晶の値段が油に比較して非常に高いので、何とかして薄荷取卸油全部を其儘結晶にする事の方法はあるまいかと云ふ事になりました。さて其の時分獨逸で魚油に水素を吹き込んで、手蠟の如き硬化油を造つて居ると云ふ事を聞き、種々苦心研究の結果、それはナトリウムを使用すれば結晶が多く採れると云ふ事を見出しました。始めには百斤の薄荷取卸油から五十斤の腦しか採れなかつたものを今度は七十五斤採れる様に工夫を致しました。又別に工場を建ててそれに關する特許迄取らせました。それから後も引續いて種々と研究に研究を重ねましたが、爾後油と結晶の値段が接近して來る様になりました。この仕事を中止した様な事もあります。

又大正十二年の大震災當時横濱で薄荷が澤山焼失致しまして、在荷が非常に少くなり、又生産も其當時非常に減額されて居りましたが故に、薄荷は自然に品薄となり、其の爲めに大正十三、四、五年とこの三年間は支那の薄荷取卸油を、毎年五萬斤位宛輸入してどうにかかうにか切抜けをせねばならぬと云ふ有様でありました。さて其當時神戸税關に元尾さんと云ふ監視部長が居りましたが、この方に此の支那の薄荷を日本に持つて來て、腦、

油に製造して海外に輸出しようと思ひますが、どうでせうかと御話を致しました處、それは一體日本の爲になるかと云はれますので、さうです非常に國家の利益になる事でありますと説明致しました處、それぢや一つ君の工場を視察に行くと言われました。そこで私の工場に御案内致しました處、之なら宜しいと云ふ事になりました、直ぐ種々手續の結果工場の一部を保稅工場と致しまして、其處で製造して輸出する事にしました。然るに其後相場が次第に安くなりまして、支那の薄荷が引合ぬ様になりましたので、其の製造を中止した事などもありました。其の當時古くから薄荷の製造をして居りました處は五軒ありました。即ち鈴木、小林、矢澤、長岡、多勢の五商標で、此の頭文のSKYNT(スキント)は、偶々歐羅巴の或る國の薄荷と云ふ言葉に當るさうでして、誠に偶然であり、且つ興味深い事であります。尙他にも一、二新しき製造家があつたのですが、極々心安くして居りました。此の五軒が寄り合ひまして、出来るだけ海外の金を澤山取らうではないかと云ふ相談をしまして、産地の方からなるべく高く買入れて、海外へ高く賣る様な事に専心工夫を凝らす事になりました、それを大正十三、四、五年の三ヶ年と繼續致しました。其時は平均毎年一千五百萬圓計りの外貨を獲得して居りました。此當時の鈴木薄荷の取扱高は、年々輸出額の四割に達して居りました。此の時分には色々面白い話もあり、又苦心談も澤山ありますが、それは又次の機會に譲りまして、茲に少しく御話中上げたいと存じます事は、由來薄荷は古く支那より渡來せる傳説がありまして、明治二十年前後より三十年前後に至る間は、山形縣を主産地とし、其の生産高も誠に少量で數萬斤を出ぬ状態でありました。其後漸次三備地方に移り、明治四十年前後には三備地方が主産

地となり、年産三十萬斤となりました。次いで大正元年項には三備地方に加ふるに北海道が主産地となり、續いて現在に至つたのであります。而して大正三年の八十萬斤、大正五年の百三十萬斤の生産を見るに至り、其の後相場の低落、或は他の物貨と比較上減産したる事もありますが、大正末期より昭和十四年に至る迄、平均年産百萬斤以上昭和八年の百六十萬斤、昭和十一年の百三十萬斤、昭和十二年の百七十萬斤、昭和十三年の百六十萬斤の如く、驚くべき生産の進歩を致しました。

明治四十年前後三備地方に於ける栽培方法、並に薄荷草より薄荷取卸油の蒸溜装置は誠に幼稚なものでありまして、薄荷草の目方を多くしたい爲めに、大薄荷(野生薄荷にして腦分を含有せざるもの)を混入して栽培するものもありましたが、之に對し其の利害を説き聞かせて、漸く其の混入を防ぐ事に成功した様な事もありました。又薄荷草蒸溜装置も段々改良されました。凡そ薄荷取卸油より薄荷腦、油を製造すると云ふ事は、一見誠に簡単の様であります。而かも中々簡単でなく、此の結晶を攝氏四十三度見當の溶融點に迄乾燥致しまして一定のものを造り、且つ薄荷油も香りを成るべく良くし、適當なる遊離メントールを残す事に就きましては、各製造家が斷えず苦心研究して居る所であります。

又販賣に就きまして徒らにお互に競争して賣ると云ふ事無く、常にどうすれば海外から澤山金が取れるかと云

ふ様に、大局に目に注ぎ業者同志が徒らに競争しては、不利益であると云ふ事に斷えず留意して参りました。結局斯くの如く致しまして、薄荷は幸ひに今日迄は品質荷造其他に付一度も、海外よりクレームを受けた事無く、日本の特産品と致しまして世界の需要を充たし、順調に發展して参りました事は、誠に結構な事であり、且つ賞讃すべき事であると信するのであります。近來科學が大變進歩致し、人造薄荷が研究されて居ります。又支那薄荷の生産が殖えると云ふ事に對しましては、日本の薄荷としては非常なる脅威を感んずる事になりますが、之に對しましては何とか良い對策を講じなければならんと存じて居ります。

尙日本の薄荷界の歴史に特筆すべき有名なるサミエル事件なるものがあります。之は大正初期に英國の大商社にして、横濱、神戸等に支店を有して居りましたサミエル商會が、北海道薄荷の大部分を買占め、或は委託販賣の契約をなし、横濱に工場を設け、腦、油製造を始め、當時の吾々古き薄荷家SKYNTの五軒の商標を奪はんとし、て大失敗をなし、僅か二ケ年にして退陣廢業をなし、而かも其の精算を附くるのに困憊し、サミエル對北海道生産者團體と遂に法廷にて相争ふ事、十數年の久しきに亘つた事件があります。

又昭和の初期に至り北聯が北海道薄荷取卸油の集荷に着手され、其後引續き腦、油の製造を開始されました。之は日本人同志の間の事ではありますが、吾々數十年來苦心に苦心を重ね育て、來ました薄荷事業の一部分、或

は大部分を北聯に割愛せなければならぬので、甚だ苦痛に存する點がありました。最近私は商工省に参りました圓プロックの方へ二十萬斤の薄荷を輸出さして頂ける様に御願して居ります。圓プロックへは從來僅かに一萬斤しか行つて居りませんが、近來關、滿、支に於きましても、薄荷を原料とする藥品、齒磨、化粧品等の製造工業が漸次發達して参りまして、其の薄荷の需要も激増する見込であります。何故に二十萬斤と申しますと、本年は七十萬斤の生産が出来る豫定になつて居りましたが、偶ま之が凶作の爲約半額に激減するであらうと承つて居ります。尙來年も減反の結果四十萬斤位のものではないかと思はれます。假りに年々四十萬斤薄荷の生産があるとするれば、内地需要は約二十萬斤の様に承知して居りますので、差引二十萬斤剩餘となる事になります。この剩餘は何處かへ捌け口を考へなければならぬ譯であります。之を圓プロック並に泰、佛印の方へ捌かしたいと考へて居るのであります。

海外賣は日本薄荷輸出組合の方へお委かせ願つて居りますが、左様にしない場合は年々ストックが増加する譯になります。若しさうなりますと生産を一層減じなくてはならないと云ふ窮狀に陥るのではないかと憂慮して居ります。

戰爭は何年したなら収まる事か見當も付きませんが、若し平和になりました暁、海外に於きましては非常に薄荷が少くなつて居りますから、現在日本にあるストック約百萬斤は僅か一年間に一掃されて終うのではないかと考へられます。さう云ふ状態になりました時、直ちに百萬斤の生産を得るには毎年の生産をせめて四十萬斤程度

に止めて置かなければいけないと思ひます。一度二十萬斤程度に低減して終つたものは、御承知の通り苗根作付による事でありますから、遽かに之を百萬斤に増す事は比較的容易の事でありまして、又其の翌年に百二十萬斤に増す事も安易でありまして、さう云ふ順序に致しましたならば、如何かと考へて居る次第であります。尙將來世界の需要が百五十萬斤、或は二百萬斤と段々と増加するにつれて、日本の生産額も之に伴つて、漸次産額を増加せしめまして、人造薄荷又は支那薄荷に其の市場を蠶食される事なく、何時迄も世界の薄荷の需要は日本の薄荷によつて充たし得る様に致したいと念願する次第であります。何卒有力なる日本輸出農産物株式会社、並に政府御當局の御力添へど御指導御鞭撻を得、又同業者各位の御協力に依つて、此の目的を達成し得らるゝ様、熱望して止まぬ次第であります。長時間御清聴を煩はし誠に恐縮に存じます。尙御参考の爲に薄荷の生産、輸出、値段の高低等に關する統計表四通（附録三参照）別紙の通り添附致して置きますから第一覽願ひます。

土屋副社長

また實は種々御伺ひしたい事もありますが、大分長い時間を取りましたようでありまして、食事の時間も來て居りますから本日はこの程度で……以上

附 録 一

薄荷苗木ノ葉ニ付出願書

北海道札幌苗穂村三拾番地ニ植付有之

一、薄荷苗木

此本數亦貫目

此代金

右ハ私共曾テ北海道札幌苗穂村三拾番地内へ前記ノ薄荷苗木植付置候處今般更ニ該苗木ヲシテ北海道屯田兵中隊司令部へ囑托方出願シ御許可ノ上ハ篠路村地味ハ苗木ノ爲メ至極適當ノ地ト萬察仕候間何卒該苗木御引取ノ上御司令部ニ於テ御擔任被成下明年發生スル所ノ草葉ヲ干乾シ該干葉ノ目方壹貫目ニ付相當ノ代價ヲ以テ出願主ノ私共へ干草御賣下ケ奉願度就テハ私共保證金トシテ苗木代金〇〇〇圓外ニ現金壹千圓也現金ノ内金五百圓ハ明治二十五年十月中ニ内金五百圓也ハ明治二十六年五月中ニ都合兩度ニ御預ケ合金〇〇〇圓也是ヲ保證ノ爲メ御司令部へ御預ケ置明年發生ノ草刈リ取候上ハ尙改テ干草私共へ御賣下ケノ節其翌年分出願ノ手續可仕候依テ此段御聽容被成下度連署ヲ以テ奉御願候也

.....印

附 錄 三

取卸油生産高

單位 千斤

年 次	北海道 千斤	三 備 千斤	朝 鮮	其 他	總 計 千斤
大正3年 (1914)	700	121			821
" 4年 (1915)	740	138			878
" 5年 (1916)	1,160	182			1,342
" 6年 (1917)	560	245			805
" 7年 (1918)	144	184			328
" 8年 (1919)	152	138			290
" 9年 (1920)	370	100			470
" 10年 (1921)	388	65			453
" 11年 (1922)	350	67			417
" 12年 (1923)	348	89			437
" 13年 (1924)	595	158			752
" 14年 (1925)	900	450			1,350
" 15年 (1926)	670	464			1,134
昭和2年 (1927)	890	258			1,148
" 3年 (1928)	700	250			950
" 4年 (1929)	880	250			1,130
" 5年 (1930)	850	150			1,000
" 6年 (1931)	758	150			908
" 7年 (1932)	560	125			685
" 8年 (1933)	1,400	256			1,656
" 9年 (1934)	700	200	30	10	940
" 10年 (1935)	620	200	50	20	890
" 11年 (1936)	1,000	200	50	30	1,280
" 12年 (1937)	1,400	220	50	40	1,710
" 13年 (1938)	1,300	200	50	50	1,600
" 14年 (1939)	1,000	100	50	50	1,200

附 錄 二

委 任 狀

一、拙者共儀今般都合ニ依リ加藤恒吉ヲ以テ部代理人ト相定メ拙者共ノ名儀ニテ左ノ權限ノ事ヲ代理爲致候事
 一、曾テ拙者共ニ於テ北海道札幌苗穂村三拾番地内ニ植付置候薄荷苗木並拙者共ノ身元保證ノ爲メ北海道屯田兵中
 隊司令部へ金壹千圓也御預ケノ件ニ付本案一切ノ事件出願ノ爲メ此委任ヲ以テ北海道屯田兵司令部へ出願ノ件右
 代理委任狀依テ如件

明治二十五年九月 日

神奈川縣橫濱市辨天通壹丁目第十一番地
 出願人 矢澤 藤太郎
 同縣同市尾上町五丁目
 出願人 多勢 吉太郎

北海道屯田兵中隊司令部 御中

右 代 人

印

明治二十五年九月 日

印

年度別三備, 北海道取卸油最高最低值段

單價三備一斤 = 付
北海道一組(二斤) = 付

年次	三 備		北 海 道	
	高 值	安 值	高 值	安 值
	円	円	円	円
大正 1 年 (1912)	950	650		
" 2 年 (1913)	900	360		
" 3 年 (1914)	460	260		
" 4 年 (1915)	410	270		
" 5 年 (1916)	460	290	620	450
" 6 年 (1917)	420	320	640	570
" 7 年 (1918)	900	380	670	600
" 8 年 (1919)	2230	630	3300	2000
" 9 年 (1920)	1910	430	740	680
" 10 年 (1921)	660	440	1100	750
" 11 年 (1922)	1200	620	2000	1500
" 12 年 (1923)	1500	900	2500	1630
" 13 年 (1924)	2300	1400	3700	2250
" 14 年 (1925)	2000	950	2800	1500
" 15 年 (1926)	900	560	1200	1000
昭和 2 年 (1927)	720	550	1350	900
" 3 年 (1928)	1100	630	1830	1150
" 4 年 (1929)	885	480	1640	870
" 5 年 (1930)	620	380	1110	725
" 6 年 (1931)	550	320	990	550
" 7 年 (1932)	1150	415	2350	755
" 8 年 (1933)	1035	450	1980	690
" 9 年 (1934)	825	460	1650	860
" 10 年 (1935)	875	550	1655	1000
" 11 年 (1936)	990	570	2040	1050
" 12 年 (1937)	910	650	1750	1150
" 13 年 (1938)	800	700	1415	1290
" 14 年 (1939)	1400	730	2430	1310

薄荷腦及油輸出高

年次	薄 荷 腦		薄 荷 油		總 計	
	斤 數	金 額	斤 數	金 額	斤 數	金 額
	千斤	千円	千斤	千円	千斤	千円
大正 1 年 (1912)	133	1,590	185	699	318	2,289
" 2 年 (1913)	233	2,103	282	1,018	515	3,121
" 3 年 (1914)	269	1,816	278	809	547	2,625
" 4 年 (1915)	326	1,805	341	697	667	2,503
" 5 年 (1916)	387	2,411	361	845	747	3,255
" 6 年 (1917)	251	1,594	260	594	511	2,188
" 7 年 (1918)	238	5,554	215	540	452	2,094
" 8 年 (1919)	240	2,547	409	1,307	649	3,854
" 9 年 (1920)	363	5,417	321	1,848	685	7,265
" 10 年 (1921)	230	2,173	245	553	475	2,731
" 11 年 (1922)	247	3,323	239	759	486	4,082
" 12 年 (1923)	172	3,454	238	977	410	4,431
" 13 年 (1924)	270	7,813	297	2,421	566	10,233
" 14 年 (1925)	421	12,478	528	5,309	949	17,787
" 15 年 (1926)	529	10,049	479	4,426	1,008	14,475
昭和 2 年 (1927)	473	4,898	413	2,314	886	7,212
" 3 年 (1928)	324	3,915	405	2,076	728	5,990
" 4 年 (1929)	464	5,170	531	2,276	995	7,446
" 5 年 (1930)	390	3,475	384	1,222	774	4,697
" 6 年 (1931)	370	2,984	356	858	726	3,842
" 7 年 (1932)	428	3,690	542	1,260	971	4,950
" 8 年 (1933)	531	5,284	522	2,007	1,053	7,291
" 9 年 (1934)	510	4,557	541	1,838	1,051	6,395
" 10 年 (1935)	516	5,401	539	2,282	1,054	7,683
" 11 年 (1936)	492	4,986	578	2,963	1,070	7,949
" 12 年 (1937)	624	6,116	633	2,975	1,257	9,091
" 13 年 (1938)	389	4,381	486	2,168	875	6,548
" 14 年 (1939)	448	5,313	553	2,584	1,002	7,897

年度別腦, 油, 最高及最低値段

單價一斤ニ付

年次	薄 荷 腦		薄 荷 油	
	高 值	安 值	高 值	安 值
	円	円	円	円
大正1年(1912)	1700	1250	420	330
" 2年(1913)	1700	575	500	220
" 3年(1914)	720	475	330	150
" 4年(1915)	650	450	230	130
" 5年(1916)	770	500	270	150
" 6年(1917)	700	650	230	150
" 7年(1918)	1400	660	300	170
" 8年(1919)	3900	1150	750	300
" 9年(1920)	3800	1050	850	230
" 10年(1921)	1100	850	240	170
" 11年(1922)	2360	1345	500	219
" 12年(1923)	3650	1500	700	300
" 13年(1924)	4350	2200	1250	500
" 14年(1925)	3500	1150	1825	685
" 15年(1926)	1600	850	900	380
昭和2年(1927)	1075	855	575	370
" 3年(1928)	1675	950	575	355
" 4年(1929)	1405	820	485	240
" 5年(1930)	1025	680	375	190
" 6年(1931)	910	575	300	150
" 7年(1932)	1750	700	750	210
" 8年(1933)	1625	690	675	195
" 9年(1934)	1265	765	500	250
" 10年(1935)	1360	905	530	270
" 11年(1936)	1500	950	650	330
" 12年(1937)	1300	1000	600	373
" 13年(1938)	1225	1060	475	400
" 14年(1939)	2200	1060	650	395

昭和十七年五月廿八日印刷
昭和十七年六月一日發行

(非賣品)

不許
複製

編輯者兼 東 弘

印刷者 東京市麴町區有樂町一丁目三番地 吉 田 信 賢

印刷所 東京市麴町區有樂町一丁目三番地 株式會社 一色活版所

發行所 東京市神田區錦町一丁目三番地 日本輸出農產物株式會社

933
188

製本控			
933	函	188	號
		年	月
薄荷陳虫菊老座談會記錄			
			冊
備考			

933
188

終

